

川柳塔

昭和四十一年一月九日第 一 種郵便物認可
昭和五十五年 五月二十五日 印刷
昭和五十五年 六月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷六三七号



日川協加盟

No. 637

六月号

村田瓢太著

25川柳生活「紅（べにばな）華」発刊

日時 55年6月6日（金）午後六時

会場 金属会館

南区巖谷東之町10番地（地下鉄堺筋線「長堀橋」下車東スグ）電話271・3935番

柳話

川村好郎

題と選者

「紅」

謝選 村田瓢太

「サラリーマン」

笠原吸江

「手品」

西田柳宏子

「孫」

菊沢小松園

席題一題（当日発表・各題三句）
会費 千円（句集・記念品呈）

主催 川柳塔社

序文・川村好郎

頒価 千円（送料共）

編集・不二田一三夫

発行所 川柳塔社

句集「紅華」ご希望の方は

〒570 守口市金下町2-20

村田瓢太方へお申込みください



アベノ近鉄 ● TEL 621-1231



上本町近鉄 ● TEL 779-1231



奈良近鉄 ● TEL 33-1111

アベノ
上本町
奈良

 近鉄

夢が広がるシヨッピング
近鉄がお届けします

ヤングのための
カジュアルウェア

クラブウ Kurabo Fabrics
カジュアルウェア

倉敷紡績株式会社



スクラップ

妻の探しものいたずらっぽく小半日

桜もほめてやっぱり菜の花の黄にひかれ

酒癖を見こんで花見の座がきまり

一応乾盃そろそろ花は忘れかけ

軍歌でごめんこれしか知らぬ花の下

中島生々庵

この頃国道筋のあちこちに大がかりな中古車売り場が目につく。フロントに売価の数字がはつてなかつたら、どれもこれも、新車か中古車か区別のつかぬ程ピカピカな姿でならんでいる。立派なお役に立つサラブレッドばかりに見える。私はこの売り場の前を通るたびに思うことがある。

お元気で何より、お若くて結構と挨拶されると嬉しくなってマラソンの群の中に走り込みそうな気がする。しかし、そうしたお世辞に近い挨拶をした後で、心ある人なら、お大

事にとか、道中はお気をつけてとかの言葉を忘れない。一見完全車のように見えるだけで一キロも走れぬかも知れないからである。その中古車の群の中に私の姿もこっそり混り込んでいる気がしてならぬ。植物人間から生命維持装置器をはずしたら、この売り場からスクラップ工場へ早速直行する私であるかも知れぬ。同じスクラップでも愛されるスクラップであるように等、望むことは贅沢かなとも思う。

川柳塔六月号



座右の句

張りかえた障子の中に母います

(一葉)

私の句

親も子もやがては独りねぎ坊主

納 糸葉

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

スクラップ	中島生々庵	(1)
このごろ思うことども	浜田久米雄	(2)
誹風柳多留廿五篇研究	入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗 紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・岡田 甫	(26)
川柳塔 (同人作品)	中島生々庵選	(4)
水煙抄	菊沢小松園選	(30)
朱楽菅江と川傍柳 (川柳太平記②)	東野 大八	(24)
秀句鑑賞 (同人吟)	田垣 方大	(45)
(水煙抄)	野村 太茂津	(49)
愛染帖	橘高薫風選	(40)
愛染曼荼羅 (下)	橘高薫風	(43)
55年度二賞中間発表		(28)

このごろ

思うことども

浜田久米雄

川柳を作り始めて四十七年、勤めをやめて十六年になる。この長い間私を元気づけ、慰めてくれたものは川柳であった。甚も将棋も知らず盆栽をすこしいじった程度でこれという趣味のない私を一貫して守ってくれたのは川柳という趣味であった。勤務を持っていた時はそれほどでもなかったが勤めをやめて家にいることが多くなつてから特に私の無聊を慰めてくれたのは川柳であった。

毎月やつて来る定例の句会、雑誌への投句であるが人の作つた句はもう作れないし私の作つた句はもう二度と発表は出来ない。かくして頭の中に自分が作ろうとする範囲は日に月に狭められてゆくのであるから段々と句は出来なくなる。それでも雑誌への投句は欠かさなかつた。定例会への出席は万已むを得ぬ場合を除き欠かさずに過ごして来た。特に偉大なる努力であつたと自分ながら不思議なほどである。

雑誌への投句に頭をしぼりやつとまとまつた句が出来清書して封筒に入れポストへ投げ込むとほつとする、やれやれと思う。句会に

作品へ影響を与えるもの	山村 祐	38
弓削川柳社から生中継	不二田 一三夫	46
一分間の柳論	前山 北海	53
田中狂二君逝く	川村 好郎	58
雅号ぶっちゃげばなし	新谷 笑痴	55
初歩教室	本田恵二朗	52
大萬川柳「交 替」	川村好郎選	54
柳界展望		56
本社五月句会	(庸佑・整理)	59
各地柳壇(佳句地10選)	藤村 亜成選	65
「むし歯」	斎藤通風選	50
一路集「オリンピック」	柳楽 鶴丸選	50
「入 梅」	田垣 方大選	51
編集後記	(二三夫・葉子)	69

座右の句

建国祭寒の卵に血がまじり

私の句

親分はいつも見物席に居る

(薰 風)

江 口 度

出席する前になんとかして兼題を作句しやれやれと思つて句会に出席、出された席題に取り組みこれが出来て提出してやれやれと思つこのほつたりやれやれと思つ時が川柳のたのしさ、ありがたさであるのだと思つ。川柳には外に物を見る眼が変わってくるのしみ、話題が豊富になったり、字を覚え古事來歴の研究が深まるうれしさ、友達がふえるありがたさ、思つたことが句になる愉快さ、一人居ても無聊に苦しまないで、生活にうるおいが出てくる徳、世の中が広くなり、自分が大事にしている私の心が円満になってゆくのを感じられるありがたさ、まだ外にもあるであろうが川柳によって得られるこれらの徳は限りなく伸びて行くのである。

私は川柳生活三十年を記念して昭和三十八年に句集「凡人」を出した。序文から印刷、校正まで路郎先生のお世話になった。全く路郎先生にはいくら感謝してもし切れない大恩がある。ありがたいことであつた。私はいま数え年七十一歳でもう六年すると喜寿になるのでこれを記念して「続・凡人」を出そうと思つようになつた。前に発行した「凡人」にならつて一頁に一句、その下に思い出や感想を書いて本文は百句百頁に限定したいと思つ。何分将来のことであるからどうなるか予測は出来ないが、いまのままで川柳をつづけて行かれるとすると今からの私の望みが達せられるだろう。



中島生々庵選

今治市 月原宵明

折れて来た証拠電話をかけてくる
ただもので無く足組んで煙草喫う
石橋を叩く男が株に負け
齒科の椅子綿嚙まされてほっとかれ
表情を見せぬ男に気を遣い

尾崎市 黒川紫香

小肥りで尼僧の声がいと涼し
白壁がだんだん春を呼び戻し
芸のない男に手相見て貰い
ホームラン納得させてボール飛ぶ
吸殻の灰がホームでよく転び

八尾市 高杉鬼遊

路郎忌を待つ一人なり師を識らず
連翹の黄につらなれる不幸者
火を吊れる無名戦士の仏たち

初恋や娼婦になった女の訃
妻とふたり今日あるいのち花の下

美祿市 安平次弘道

春や春ゆつくり廻る花時計
過去当てる易者未来を信じさせ
小さい悪 見て見ぬふりも処世術
日本に四季あり四季の酒の味
辞書練ってくって教養カパーする

宝塚市 傍島静馬

顔中で赤ン坊うまそな大欠伸
衝動買いやめて潤う台所
お見舞にぶらぶらやまい気がひける
説教調ませて保険屋点稼ぐ
人あたりよい子入試に落ちてくる

河内長野市 井上喜醉

弱点を責める言葉の嫌やらしさ

肩の荷が降りて名刺へひまをやり
負け知って黙って退る潔さ

下手くそな字でも誠意溢れてる
雑草もやれやれ春で気がゆるみ

大阪市 川口弘生

発つまでを二人の時間にするコーヒー

正面から入れば仁王に睨まれる

回復期妻の背中へ手を合わせ

追う者の強味も年齢には勝てず

善人とみたか赤ちゃんやつと笑み

鳥取市 小林由多香

ライバルの榮転血圧また上がる

実力のないのがジャンケン勝残り

化けているつもり尻尾つかまれる

のびきってゴムもうゴムに戻らない

山坂を越えて金婚まるく老い

和歌山市 野村太茂津

窓際でいつか無口の生字引

控え目は無気力と見る知恵の無さ

反論の知能指数に触れず聞く

機微に触れ弔辞へ拍手したくなる

被害妄想素直になれぬ不眠症

岡山県 嘉数千代香

白百合の白汚すまじ春嵐
まっすぐに行けと野仏ささやいた

耐えぬいて来た風船の割れる音
梵鐘の余韻を包む春霞

良心の重味で靴がちびていく

太田市 藤田軒太楼

よそ目には円満にみえて孫抱けず

納得はしたが筋だけ通しとき

肩書のふえて家庭に落ち付けず

面映ゆい嘘が祝辞に盛り込まれ

碁仇の和尚が促がす花だより

富田林市 岩田美代

真っすぐに春の好意を受けとる姿勢

春が言う何とみじめなもの想い

春風がころころ甘い考えて

孫の首菜の花畠に溺れそう

きれいな事ならべておれぬ春が跳ぶ

奈良市 宮口笛生

年金の高へ暮しの予定する

退職金年頃一人残ってる

陽やけして辞めた職場へ顔を出し

これからが体大事と送別会

求人広告大正生れに用が無い

奈良県 村上春巳

俺の留守男の靴を並べるとき

本当の顔を探している鏡
馬鹿でかい声を出す善人である

会者定離あまりに離婚が多すぎる
初老かな妻におしやれをすすめられ

岸和田市

高橋操子

情熱とはかくもかなしき事起る

食欲をノックしているふきのとう

死ぬときは一人甘えは許されぬ

琴の音がほしいお城の花見酒

老兵同士会えはなぐさめあう世相

大阪市

本間満津子

春の陽はやさし扉をひらかせる

喪服にも地味の派手のと数珠の色

自分のこと大事と思うほどに若い

噂のもと辿れば自分につきあたり

へそくりも不意の出費に拝まれる

島根県

小砂白汀

逃げた跡叩いて一層しゃくな蠅

ささやかなみやげへほぐれてきた隣

台所へおとこを入れる赤い爪

弱点を握らせあやつる術も持ち

滲み出るおんなをジーンズもてあまし

高槻市

若柳潮花

梅 桜 掏摸には掏摸のスケジュール

しゃぶしゃぶへ近江の夜は雨になり

湖あれて春にさからう音をたて

友の喪に来て懐かしい顔に逢い

カラスはカラス鳩の群へは降りて来ず

堺市

高橋千万子

毎日が本番ですといい言葉

母の愛恋知り初めて空回り

待ち呆け見ぬかれた身のおきどころ

噂ではすまぬ火の粉がふりかかる

よい話疑いながらききほれる

大阪市

神夏磯道子

満願の札所で欲が捨て切れず

雑踏の一人一人にある明日

柳の芽恋の囁き待つように

看病をしてから溶けて来た心

春の陽よ嬉しいのです立ち話

和歌山市

津田与史

散る花の潔きを人間真似られず

たくましく生きて雑草嫌われる

一合で足りる夫婦で生き伸びる

値上りへまらずは花見を犠牲にす

割れもののように闘病抜かわれ

八尾市

高橋夕花

家族から心離れて桜見る

桜満開 女と云う身のおきどころ

進みたくて進みきれない五十坂

月末も花屋の前に来てしまう

春愁の二字を着ているシクラメン

倉吉市 奥谷弘朗

妥協せぬ片手はちやんと残しとく
さりげない所作に人柄にじませる

大物の胸三寸でケリが付き

春うらら勤めせぬ身の爪が伸び

物よりも心豊に生きる策

米子市 小西雄々

男対女に変化した善意

横着の才能おしむ蔭の声

酒がみな喋ってしまった悔を抱く

客足の中に食い逃げまで混じり

人情をあてにするからけつまずき

倉敷市 水粉千翁

信念を通す北風撫でてくれ

口ほどにないとは涙もろいやつ

おもむろに力になれる口を切り

思い出に耐える幕前に花を立て

出直せたからわたくしの旅となり

鳥取市 岸本無人

山の湯の朝の別れが湯にけむり

真すぐに歩いて運にぶつからず

戸じまりを忘れる程の貧に馴れ

食卓に種から育てた一夜漬

倉敷市 田垣方大

春描けばはるかな故郷の山や川

ジーパンの娘が追越してゆくペダル

美しく老いたし頑固ひっこめる

無茶をして薬石効なくとはおかし

充電に來た保養地で疲れ果て

岡山県 出原敬一

無料奉仕の救いは風があなたかい

野も庭も春めき髪を染めている

アル中の本心聞けば淋しがり

都会を諦め花を育てている無口

地下足袋を女会釈で抜いてゆく

大阪市 本多柳志

意見する言葉の端にある自賛

一と皮をむけば猫ばばしそうなり

生字引と云われ盃貯めている

へべれけの瞳に友情が見えて来る

どう逃げて見ても地球の上なのさ

神戸市 仲 どんたく

御町内の春眠破ぶり回収車

ぼんぼりへたわわの花が頬を染め

謝恩会くずれの晴れ着咲く喫茶

切りのええ齡やと会社やめさされ

背に腹がキヤベツへ花壇あげ渡し

半身のいとしき髪よ櫛けずる
島根県 錦織文子

今だから言えると風の私語を聞く
朗報の笑顔普段着のまま上がり
やわらかな笑顔へ善意ためてある
指きりの二人へ信ずる明日がある

藤井寺市 児島 与呂志

春の歌心の泌みを消してくれ
かろやかな歩巾で言葉考える
泣くことをあきらめてから意地も捨て
世話好きがだんだんつらい道を撰る
迷う朝鏡にニツコリする少女

守口市 野呂 右近

縄のれん戦いすんだ敵味方
投げなくて良かった石をそつと置く
淋しさは影さえ見えぬ暗い道
どちらにも付けぬ振子に似た暮し
駆け抜ける利那少しは残る悔

米子市 八木 千代

それなりに老女の帯の花模様
いたわりへ危うく寡婦を忘れかけ
残り火にゆくすえの透く掌をかざす
赴任した夫へ素直な愛綴る
それからの胸にはしんと雪が積む

鳥取市 河村 日満

警察の凱歌時効を止まらせ
天下りここでも蜜があり余り

大正の余生に恙なき祈り
殉死でもする気の肚を疑われ
生きのびた心に深く棲む軍歌

出雲市 原 独仙

それぞれに独立した子他人じみ
選者誰れだろうと個性曲げられぬ
葉桜で機嫌最高こらさのさ
借り着には非ず時代が派手にする
徴兵論さて修身の失せた国

大阪市 金井 文秋

子が巢立つまでの夫婦に生きる張り
不服なら辞めてもよいと飛ばされる
マイペース儲け話に耳貸さず
新顔にマンネリ活を入れられる
気が小さいと云われて自殺浮かばれぬ

倉敷市 稲田 豊作

こまねずみ楽になれぬを不思議がる
悟りには遠くあの世は近くなり
凡夫の悟り諦めた顔になり
福の神隣りまで来て折り返えす
抜け穴を探す弁護に顧問料

川西市 戸田 古方

アンテナがぬつと伸びてるうららかさ
咲くときが来たので咲いてあたりまえ
店開いていたので買わしてただけた

今から咲かれたんではもちそうにない桜

サイフの底から失せものもの出る真昼

島根県

飯塚 虎 秋

いつの日か夢は砕けて散る定め

憔悴の窓に山脈かすみ立つ

ほどほどの馬鹿にも馴れた長寿ぶり

切々の詩は老いゆくあえぎかも

全粥にいのち確かにかみしめる

姫路市

大原 葉 香

ちびてゆく命へ今日の火をともす

止まり木の小鳥に明日を問うてみる

背のびした今日一日を悔いている

老いの坂ここまでおいでと喜寿米寿

雨毎に怯え怯えて春が来た

島根県

西村 早 苗

どこに行くでもないに昼休みの化粧

無理に花咲かせて春の陽に背く

敗北の肩から丸み崩れ出し

妻の怒りが家中を抜ける

即席の返事見抜かれたあせり

鳥取市

両川 洋 々

風邪で寝る日を働かすまなかり

人生の迷路へ目印ないあせり

愛犬の死は血圧の老父へ伏せ

二次会は負け犬ばかりの酔いとなり

運が向き変えたぞ血圧また上がる

倉敷市

野田 素身郎

不器用な男同士のコップ酒

今度ばかりは妻も味方をしてくれず

各論になり賛成の声がない

諸物価値上がり仕方なく日向ぼこ

バス遅延桜並木の停留所

宇部市

平田 実 男

食料品売場では主婦へ戻る顔

電気ガス煙草 血圧まで上がり

若さの秘訣老いて子に従がわず

童心に返って蜂の巣をつつき

新築の木の香畳の香ローンの香

岸和田市

植山 武 助

定年までをゆっくり窓際族になる

他人から見れば馬鹿げた願ひ事

三、四服薬余して快復期

一人暮しの気楽さだけを羨まれ

送ってやる送ってやると新免許

松江市

中川 晃 男

抱いた孫の腹話術で皮肉言う

黙っては居れない老いの唇ふるう

どうにもならぬかも知れないが祈るだけ

御先祖の墓にも春の猫柳

地下足袋に踏まれる無残 花の雨

東大阪市 本多清人

反対があるから組織が維持される
カメラへも名人ポーズなどとらぬ

針金で枝の素性は曲げられる
夏に又来いよと甲子園拍手

春の雨行き先迷うターミナル

大阪府 河野君子

子供より子供のような老父でいる

花の時期越えてからを長らえる

経済考元気な夫がいてくれる

旧友訪えば忽ち童話の園となる

政治家の手品は奇蹟を生みやすし

倉敷市 白井三林坊

限界を知って阿呆な貌になる

誤字脱字母のふしくれ手が匂う

生涯を猫は猜疑の目で生きる

端然と仏間に母のほどき物

照れかくし老眼鏡を拭いている

和歌山市 若宮武雄

千金の春宵夢なき夢をみて

八時間ぐっすり夢のない男

思わず知らずに合掌をした苦痛

足跡はくつきり重荷負う歩み
まっすぐに歩きたいから譲る道

島根県 堀江芳子

ひとつずつ脱いで心の中も春

老いの坂のぼる呼吸を見つめあう

愚痴言える伴せ笑うお月さま

意地っぱりこころで握手したくても
知ってても老いの一步はとほげとく

大阪府 小出智子

双葉句会

木々芽吹く友一人増え二人ふえ

友はみなよき姑になると言う

長生きをすると言われたおそろしさ

雨の日の電話が愚痴になつて

花活けてすでに余生のはじめとす

島根県 堀江正朗

この音をここで聞くから懐しい

合掌の手と手の中へ陽が昇る

つまずいた小石拾って忘れまい

雑草は虫も育てる温みもち

そのなかに妻もいるらし笑い声

竹原市 山内静水

険悪な空気へ膝を組み正す

酔いしれていた雰囲気の間味

燃え上る世論へしっぽを切つただけ

天二物与えず育つ子の寝顔

可愛さが余って火ともなる言葉

ホノルル市 前山北海

高見山念願叶い渡辺大五郎

関白宣言女尊の国でしてみたい

孫の名連ね誕生日のプレセント

忙しさに追われ四月馬鹿など忘れ

ダイヤルを廻わせば近き日本の声

松江市

夜行列車をみんなの声が追っかける

簡単なよう湯豆腐の上手下手

サケの故郷を人間が奪う

首をひっこめて亀我慢する

スタミナに自信じっくりチャンス待つ

東大阪市

幸せは茶の友書の友詩の友

ひとり居の気楽さ春眠むさぶれる

走り廻る子の足欲しい老いの足

春うらら計報聞く日の淋しさよ

水鉢の底まで届く春の陽よ

大阪市

血圧良好遠廻りする桜道

風邪の床ぬけると桜が咲いていた

ランドセルはるかな道を歩き出す

仏光院両手ある身の恥しさ

空白の日記が語る冬ごもり

岸和田市

柳 楽 鶴 丸

何を待つ蓄のままの紅椿

老いの身の惰性を趣味が歯止めする

愚痴許りそれでも嬉しい久し振り

毛糸針心もはずむ春の彩

富田林市

陶婚の夫婦へ山から風届く

首の無い男で山に雨が降る

母ひとり山の絵買いにゆく風雨

卑怯者山へ行く日を教えない

猫柳樹氷の中で背を丸め

大阪市

東京からお座敷かかるへらへら踊り

選挙資金臭い動きの兜町

招かれてポケットマネーで行けぬとこ

着捨てするお客をけなしたりはせぬ

使い捨て族に負んぶのファッション

大阪市

茂平のお薦 主税のお薦にほくも惚れ

美しい看護婦がいて流行るなり

人様の花の句ことしも読んだだけ

TV朝日「ワイドサタデー」ゲスト出演

太陽に殺されそうな夜行性

同「川柳饅頭」宣伝(55・4・26)

落語家の「饅頭こわい」の手も使い

大阪市

板 尾 岳 人

大 坂 形 水

不 二 田 一 三 夫

早春の輝き老いには眩し過ぎ

古 野 ひ で

大阪市

西 川 善 一

賃上げの分値上りで足が出る

一つの幹から善い枝悪い枝

屈託のない指話の人等の笑い顔

過ちを許す言葉にうなだれる

兵庫県

遠山可住

知り合いのない野良犬で尾を垂れる

砂糖湯を飲んでお医者か風邪をひき

末っ子も大学 鉢巻しめなおし

座禅組むようにいい蛸蒸し上り

青森市

工藤甲吉

大根に不作の年を威張られる

自分から自分をすてる意気地なし

逆境を逆手にとつたい度胸

極楽へさっさと行った妻に負け

新宮市

大矢十郎

いざという貯金へ小さないざ重む

鍵掛けて見たが盗られる物もなし

建て売りという建て方がある槌の音

ストの列ストに関係ない話

和歌山市

福本英子

満開の花が誘うた手弁当

じよんがらの恐さよ撥が活きている

すきのない女と二人で間がもてず

嘘一つ消す消しゴムを持っている

奈良県

上田翠光

ちち牛の乳房は産んだ子を知らず

前身は毛虫と見えぬ蝶が舞う

蝶になるまでを毛虫は嫌われる

心耳すませば蓮の花咲く音がする

鳥取県

川崎秋女

嘘でいい骨まで愛すと言つてほし

嘘とうそ重ねて嘘の中に棲み

ジャンケンの拳が震えている勝負

今日からは期待重たいランドセル

京都市

松川杜的

ループタイで出掛ける六十路に恋があり

マウンドの孤独知る人ぞ知る

ハスキーな声が上役に気に入れられ

浮世絵美人どなたも細い眼で笑い

島根県

榊原秀子

もう泣かぬ涙と決めたお月様

云い勝つてみてもむなしさだけ残り

棟上る日の吉日は空も晴れ

もつれ糸解けるを信じなお祈り

倉敷市

斎藤通風

栄転は減棒に似た家族つれ

春また芽ばえて苦勞の夜の雪

一流の板前磨ぎは怠らぬ

儀打ばかり打たされ今に平役員

和歌山市

内芝としよ

心までピンクに染まる山の春
花びらが小川に流れて春はゆく
普段着へ満ち溢れてる健康美
赤い服案外似合つて春の旅

今治市 越智 一水

鏡見て心に化粧せよと言ふ
下積みそのまま停年で愛される
花わけて無縁仏にさし上げる
グレン車がわけなくすえる庭の石

岡山市 時末 一灯

先生と呼ばれて老いる貧しさよ
朴訥も或る日は無色のかくれ蓑
闇に嚙む指ぼそぼそと語りだす
野仏の人恋う顔を見てなごみ

岸和田市 島崎 富志子

盛装も不断着も居て城まつり
雑草が春の足音聞きつける
運賃の値上げが私を歩かせる
自画像に断ちきれぬ愛ぬりこめる

唐津市 新岡 回天子

とつぎ先き内緒と母がそうつと呉れ
笑わせて法話が決りをつけており
此の家を担保印おす三代目
念願の椅子かんがえ見れば後がない

岡山県 岩道 博友

子に賭ける夢通り過ぎ孫にする
背むかれた友情残し街を出る
先生が小枝を切つて花が活き
道標へ背き或日は邪道ゆく

諫早市 原田 明春

春風が腋から抜けて乳房撫で
腹が立つ値上げの中に酒タバコ
嫁が来て姑の指定席きめられる
男らしくなつてと女らしくない女房

京都市 都倉 求芽

どのようにも読める道しるべに迷い
雲散らす風は自分で起こすもの
あの話こらでしとこ押さえとこ
夕桜入り陽あつめて神の色

大阪市 黒田 真砂

翺びすぎる娘を案じてる夜のしじま
未だ炎えるものあり白髪そつと抜く
母の夢見た日の涙花菜漬
何もしてやれぬ酸素の父見つめ

松江市 竹内 寿美

二番目が出来たと久々嫁の文
まだ心通わぬ職場十日たち
逢えぬ日がつづき私も花曇り
春風に少し逆う雪柳

泉佐野市 阿萬 萬的

日展を見て

色も音も吸いとり湖水春を待つ

みんな灰色湖北の三月まだ寝てる

日々好日白壁に陽の当る家

漁港募色灯台だけが生きていた

東大阪市 齋藤 三十四

弘法と同行四国の春をゆく

団地では団地サイズと云う雛で

リーダーの手腕は部下にみくびられ

家元にそむき反動呼びりされ

守口市 村田 瓢太

利用価値薄れて来れば寄りつかず

犠えの羊はいつも用意され

天狗の集り互の鼻が邪魔になり

殺してやりたい程の奴だが上司なり

豊中市 増田 次章

駐車違反している奴にどなられる

定年へ静かにすすむカレンダー

待つ列に背中を向けて長電話

運だけと云えぬ人生ふりかえる

和泉市 西岡 洛醉

久方の出逢い消えてた泣きばくろ

どっこいしょ五十二歳生きて居る

裏側の顔は路地しか通れない

善人の手相は母のくれたもの

竹原市 時広 一路

夏の貌ちらりと見せて春の海

飽くという言葉を知らぬ海の貌

追いつ越しをさせない意地で前を行く

手拍子へ音痴の歌が乗り切れず

西宮市 島居 白宗

国交はどうあれ気安く渡り鳥

翔ぶ意気も甲斐しよもなく日々平和

皮肉ともとれる言葉で褒められる

逢いたいし逢えばただでは済まないし

堺市 岩本 雀踊子

老夫婦どちらも先に死にたがり

野仏に離農を詫びてる妻の影

朱に染まる心の弱さを見てしまふ

木蓮の花の白さが暮れ残り

大阪市 西森 花村

金借りる小道具指にニセダイヤ

給料日ネオンが僕の目に写る

夫より保険会社かたよりなり

地球の最後それなら地価も下るべし

堺市 藤井 一二三

ポックリ寺に詣る長寿を羨まれ

遠回りする気にさせたおぼろ月

幸せを呼び込む汗を拭いている

浜田議員とばく問題

神明に誓つてと悪いことをする

呉市 横田英詩

つつがなしと書いた日記に欠伸する

三日坊主が又々次の趣味探す

逢いにゆく背中へ風という味方

苦勞して妻ピーマンが好きになり

兵庫県 大江秋月

ユーモアも混ぜてきれいなガイドさん

水滴が肩打ちにくる龍河洞

窮屈な顔で觀光長尾鶏

竹林寺賽銭箱が巾をとる

大阪市 河井庸佑

騙されてまだかばつてるお人好し

ゆとりある教育ゆつくりすべり出す

一枚の辞令大の男振り回す

冗談に本心も入れ探つてる

松原市 北野久子

捨てようと思えば未練出る古着

樟脳をたつぷり入れて冬終る

それからの夫言い訳くどくなり

ナイトクリームたつぷり塗つてまだ女

兵庫県 辻文平

鈴つける役逆らわぬ母がある

拡大鏡で見たばつかりに読みそこね

酔えば寝る唯それだけの父でよし

バス停へつられて駆けて老を知り

米子市 佐伯越子

心掃く写経にはほのかな夕ざくら

踏み込んで胸のしこりの紐がとけ

山の墓野花を抱いて夕焼ける

日記帳白紙のままのつらい日で

米子市 林瑞枝

真ん中の居眠り講義の張りが抜け

手に負えぬ子でした町議と云う名刺

垣根越し花褒め合つて隣り組

アルバムは迂回の歳月しゃべり出す

大阪市 江城修史

一筋の道行くわが子にある重み

想い出があるからみどりの風が好き

ふとよぎる心の影にうろたえる

泣き濡れし小鳥の砂よ啄木忌

松江市 梅本登美也

心ではほつとし乍ら喪服ぬぐ

老夫婦ふと寄せ墓のことに触れ

わかめ売り去年の礼も添えてくる

出来心我に返つて恥しい

笠岡市 松本忠三

小遣いへ文句をつけて出してやり

春の陽をさうけ道草のランドセル

弁明を考え社長室へノック

形式にご質問はとたずねられ

倉敷市 小幡里風

すれ違いシャネルとと思う春の宵

京訛りまだ耳にある宿をたつ

美しく老いて微笑は忘れない

負けられぬ君と同じ靴をかう

貝塚市 行天千代

親の白髪抜いてやつてる子も白髪

耐え忍ぶ事にも馴れた姑の座に

散る花に身の黄昏れを見る思い

なつかしい飛行切符を捨て切れず

奈良市 森田カズエ

登りだけケーブルでゆく月詣り

逃避行靴の底のサングラス

受話器から距離を忘れた孫の声

スカートに変身してゐる母の服

大阪市 中川滋雀

合掌をほどけば凡夫のしがらみに

あの女ともしもの夢が背をはしる

同郷のよしみに財布まで覗き

つまみ食いスリルの味で消化する

八尾市 香川酔々

唯我独尊友だちなどはいない釈迦

枝ぶりはあの時のままたけくらべ

京の春宙に浮いてゐる大文字

どんぐりころころ名札ピカピカ一年生

鳥根県 大森孝華

体調を知るや鏡が語りかけ

閑人へ呼びとめられて街の角

道草が正義の石に伸びなやみ

連休へ嫁は編むらし春の糸

米子市 石垣花子

水中花花のいとなみ知らず揺れ

ジャンケンで負けブランコの下はずね

五十年夫婦の歴史を抱く笑顔

絵にもなる姿で山は人を呑み

西宮市 藤村ノ女

喝采のない善人のちびた靴

潮時を見て女帯を解く

思い出の渚に捜す桜貝

ちぎり絵をつなげば母の影となる

鳥取県 清水一保

胸襟を開く言葉に針を選り

力んでも入道雲に春が無い

病室の窓にも春の陽がのぞき

背丈だけ伸びて過保護の慌てない

檀原市 岩井本蔭棒

下戸にすりゃ情容赦のない会費

輪廻とや血を分けた子に背かれる

一握の砂にも四季の詩がある

救急車呼ぶほどでない朝を待つ

鳥取県

鈴木村諷子

桜前線うちの桜も撫でてゆき

雑草の下から地価がもり上る

驚天動地予告もなしにやってくる

丹前を女が着れば女物

倉敷市

藤井春日

高校へやる三十万は母の汗

お流れを盃洗で受けるのも若さ

宿命か悪人なりの死を選び

奇麗ごと云うてちや食えぬと女脱ぎ

東大阪市

市場没食子

借り畑余生気ままな鍬かつぐ

値上げ値上げついに配給米に代え

句集「夫婦」刊行句会(二句)

旧知新知降る中の顔有難し

花束を孫から受けるうれしい日

大阪市

津守柳伸

来年は誰かと来よう春彼岸

衣食住足りて夫婦にすぎま風

夕霧が包んでくれる森が好き

三寒四温また増えて来た独り言

東大阪市

高橋鬼焼

給料の軽さを笑うポケットで

振りむけばネオンの彩が呼びそうで

さくらさくら妻とするめの足を噛む

カーブ球投げて無口な妻である

春の炬燵で自分勝手な夢を見る

一本の道に逆転勝ちはない

少し歩いて長女は赤い靴が好き

春の一酌一酌に歩き始めた長女置く

松江市

小林孤呂二

鈴の鳴る方には迷路ばかりなり

大望を追わず粗食の日々愛す

風流な酒でさくらに覗かれる

うれしい日の湖は金波のごとく映ゆ

松江市

恒松町紅

霧囲気をこわす音痴へ順が来る

夫婦して積んどく主義の性が合い

平和すぎる不安へ今日も掌を合せ

酒断って夜の時間をもてあまし

鳥根県

梅みどり

過去の影うすれてわびし日の流れ

春日長ピンポン玉のはずむ女

奥出雲神代を語る川の音

だんだんといとし子反旗高くあげ

竹原市

森井菁居

クラッチにバックはいらぬ男坂

ぬけぬけとしらを切るから許されぬ

四面楚歌開き直つてみたところで
妻の手にかかると解けるもつれ糸

岸和田市 原 さよ子

子に歩巾合わせて貰う齡となり
セールの気軽さ儲けているそうなの
教の子の思い出一人で温める
頑固さを残して手足先に老い

和歌山市 坂口 公子

春らんまん酒の魔性の笛をきく
満ち足りた女が好むきつい坂
おどけつつそつと本音を打診する
別れぎわちらつと本音をのぞかせる

和歌山市 浦野 和子

大話に来て善人歩を返す
他所さまで小まめに釘を打つ夫
友達のまま居てネと云う含み
伴せな十指は合わすこと知らぬ

岡山市 花田 たけ志

裸婦像を芸術的な顔で見る
茶の筈が酒に変身してあわて
無駄口を叩いて本音に少し触れ
横着なようにも見える左きき

島根県 大野 酔夢

コップ酒独りに堪えて刻を飲む
古くさり引きずり女翔びたがる

左手も右手も稼ぐ観光地
追伸でやつと本心見せはじめ

和歌山市 西山 幸

花咲く日信じ黙々種を蒔く
淡い虚しいときめきがあるさくらんぼ
くず箆に負けがいつぱい溜まってる
贅沢に慣れすぎてきたベツトたち

京都府 間嶋 青丹子

春を呼ぶ火の祭典に奈良の夜
へそくりも暗号で書いている手帳
土砂降りの中を世話好きやってくる
ワンマンの個性が社則として活きる

藤井寺市 中原 比呂志

金魚追う紙は破れて花掬う
堪忍の緒の切りようの知らぬ人
ことわざは天中殺よりよく当り
詰襟が一寸だぶつく丸坊頭

大阪市 藤田 頂留子

喜怒哀楽忘れる事のむずかしさ
生意気も親の欲目に頼もしく
立てひざが座り直した良い話
幸ち遠く深く語らぬうすい肩

岸和田市 福浦 勝晴

人生は定年からさと句もひねり
乗り遅れをバスは見捨てて振り向かず

インフレを嘆いて子等と摘む蓬
週刊誌に名が出て出世のプロローグ

大阪市 太田良子

入院三句

過信した体へポツクリ穴が明き
終点が見えぬ病氣も情けなく
お見舞の電話が又も長電話

松原市 谷垣史好

読みさしの本が幾冊菜種梅雨
引け際の涙 悪事を帳消しに
陥し穴己れの掘った穴に落ち

姫路市 植村客遊子

髪染めて出るから皆にうたがわれ
つい妥協それからケチがつき始め
紙吹雪もみ出す様にかくし芸

神戸市 中村ゆきを

蒸発をしないと妻におどかされ
永劫を信じる阿呆で生きていく
打ちとけてみたら若さに裏切られ

枚方市 宮川珠笑

竹の根が石垣の割れ探しあて
渋滞の車列横ぎり耕耘機
古くとも我が家ローンが追うて来ず

大阪市 那須鎮彦

大漁の土産をつんだ帰り船

自分に勝つ時父は眼をとじる
片道切符持った男にある強氣

寝屋川市 宮尾あいき

故里のイメージ水車小屋と共に消え
落椿浮べたかけいの水も枯れ
白砂に寝て遠い昔の夢を追う

東大阪市 崎山美子

雛段のつけが実家をおびやかし
一枚の辞令に別居しいられる
ライバルの底力みる棒グラフ

大阪市 神谷凡九郎

美しくありたし心を深く沈ませる
お化粧の下の素顔の思うこと
時々鏡の気にもなつてやれ

京都市 山本規不風

祖父と旅人の心を孫の手記
病妻がすすめる旅に渋る雨
人の聞く気配に受話器へ咳をする

岸和田市 狭間希久志

引き出しの整理は妻の留守撰ぶ
目色見て心の読み方学ぶ弟子
カラオケが余りの音痴を睨み据え

下関市 国弘半休門

口下手で渋って漁夫の利を占める
アベックできて新婚のコース聴く

勝ち誇る方を叱って泣き止まず

羽曳野市

榎本吐来

割勘を譲らず下戸の抱く意地

ふる里の息吹きが迫る花便り

求人案内はみ出る歳を知らされる

東大阪市

萩尾真佐志

老眼のいる悪友でタカが知れ

ポイ捨ての車窓道德心も捨て

近くの他人とは云うものの団地族

大阪市

天正千梢

浮き沈み人の心がよく分かり

「思いやり」言葉だけは知って居り

一人ぼっちで手ぐすね引いている

呉市

林野甦光

欲張りなおんなが積んだ砂の城

相槌を打ってる女の安らぎか

その過去は知らない女の手が白い

寝屋川市

江口度

縮むだけ縮むと明日がばら色に

背信の小指きりきり痛みだす

各駅停車駅毎拾って行く花見

堺市

伏見茂美

女同士は良きかなお昼買うてくる

カーテン引き私一人の寝る支度

背信の友のわびしい目に出会い

兵庫県

河原みのる

スクスクと若木と語る老いたのし

八十にして未だ遺言を書きしぶり

順番はエンマだけ知るクラス会

鳥取県

金川満春

方便の嘘矢表に立たされる

此の年で今更煙草止められず

二次会になって無口が気炎あげ

枚方市

稲葉星斗

公園のローラースケート春の音

春闘の弁当開く花の下

桜花庭に咲けども主人亡し

笠岡市

木山遠二

自惚を妻に相談して捨てる

老妻に敷かれて余生恙なし

散る為に咲くのか桜散り急ぐ

大阪市

北勝美

一刻は声もとだえて呑む固唾

摺り減った白いモップに知る会社

お早うへ箒せつせと顔上げず

鳥取県

森田布堂

知情意の知だけのばして世が狂い

約束を信じて孫のいい寝息

遭難のニュース聞く頂山は晴れ

平田市

久家代仕男

釣り堀のぬるみ動かぬ浮木の位置
医大パス父は植物人間で
惜しまれていのち冥利を散る桜

玉野市

小谷 仙山

曲り釘こんな所で役に立ち
親の顔知らぬ蛙が親に似る
都合の悪い本だから取り合わず

鳥取県

林 露杖

手の内を迂闊に見せた日の焦り

同僚の急逝二句

急逝の計をきく花の朝の冷え

満開の花の帷に君ねむる

羽咋市

三宅 ろ亭

わが意見通して狭く住む男

としよりの自制は効かず酒席ミス

かけられたワナ見抜けない頼りなさ

出雲市

高橋 可保留

散り初めた桜見て来たパトロール

心境は封書で里の母へ告げ

叱つてもすかしてもみる子のむし歯

岡山市

井上 柳五郎

酔うたから言うのでないと本音吐き

スクラムを解けば氣勢のしばむ顔

火の車ハンドルさばき妻疲れ

大阪市

欄 蘭

世の中を凡て見てきた孤高の死

風船ものどかに逃げる遊園地
借金の前ふれ泣き言並べられ

三重県

坪田 冬花

子の病い無理矢理神が呼び出され
初なりの柿仏壇であらたまり
嘘云って澄んだ坊やの瞳が怖い

岸和田市

清野 こう

水鏡して白鳥の羽づくろい

御誘いは気軽に受けて一人者

魂胆があつて気軽な子の返事

大阪市

室谷 徹舟

桜の木だから桜の花咲かせ

手土産を提げて高い敷居またぐ

エリートの花道うまく天下り

大阪市

神田 秀峰

邪魔くさい云えば進歩は行き止り

真心が仇で返つた世を嘆き

人生は所詮一人で旅を行く

寝屋川市

高田 博泉

真面目だけかかえて勤続五十年

スト出来る社会を平和だと見るか

再会のときめきだけのお茶の味

仙台市

川村 映輝

お日様も早起き水の温るむ候

短気ぐつと呑みこみ折れることにする

影さびし子供のない老夫婦

青森県 五十嵐 操 史

聞く程に段々涙もろくなる
狸寝入りコップの音に起きてくる
若い内苦勞なされと母無口

福山市 桑 田 静 子

ああ言えばこうと世間は跳ねかえり
哀しみを真一文字に結ぶ口
五体満足この上何の愚痴不足

寝屋川市 柴 田 英壬子

新茶出てかるときめき持つ夫婦
親展と書かずに無心何気なく

岡山市 直 原 七面山

主役食う芸の冴え
拗ねてみる愛もあり

加賀市 細 呂 木 魯 木

ほほ笑みが胎児に伝わる若い妻
ハンターはけものを愛し撃つ矛盾

八尾市 宮 西 弥 生

大げさに騒ぐのも女 年がない
正面で生きる女の太い腕

和歌山市 松 原 寿 子

人形の瞳の底に海がある
歯車が合いそう雑踏避けてから

和歌山市 桑 原 道 夫

便所の樹に当たり少年のホームラン
狂うまで泣かぬ電線陽が落ちる

本 田 恵 二 朗

腕時計やたら見る癖うとまれる

泣き上戸のうらみ節から座が白け
オルゴール聞き飽きそうで聞き飽きず

れんげ草のままごと忙しい
れんげ草の料理で孫にもてなされ

尼 緑 之 助

若い母子に四月が始まった
超美技も高校野球の甲子園

セオリーの裏はやっぱり裏が出る
それぞれのマスク青春翔ぶ四月

一犬吼えて地球が狂い出す

若 本 多 久 志

ナイターのテレビぐらいで血をわかし
余命幾ばく為すことあり余り

人事尽さず天命を待つ身かな
凡愚の口癖なるようにしかならず

重荷おろして人生は何だった

菊 沢 小 松 園

塔動くと見たは眇か雲流る
遠雷の凄さに夜這引き返えし

風を切る女も曾つては身をひさぐ
スイッチは女の方の手で断られ

親が来る知らせで急にササニシキ

正 本 水 客

向い風夫婦で後や先になり
爆笑のなかへ集金はいりかね

止り木に男はおとこ溜めている

商品券買いたいものが何もなし
世話好きをがっかりさせて旅にいる

西尾 栗

累卵の生涯にして子を育て
秀才の家系に生れクリスチャン
男同志の莫迦な合図を見てしまふ
貸した方が未来永劫忘れない
信号へ歩幅の違う手を握り

伊藤 茶 仏

乱気流空の青さが嘘を吐く
口論を肴に唾がとぶ屋台
破廉恥を叱る血気は老いになし
問題はむしろこれから石頭
責任を一人で背負うお人好し

浜田 久米雄

家計簿に百円酒の値が上がり
年金をくらべて胸をなでおろし
七十になって五十の肩痛む
割り切っている定年を力づけ
老人会に欠席をしてお若い気

川村 好 郎

平熱のままで過せし金婚か
天網恢々悟った時はもう遅い
定期券小刻みに買う気の弱り
急逝の報せがつづく春不順
結果どうあろうと汗は忘れまい

第四回 全日本川柳大会

日 時 昭和55年6月22日(日曜) 正午より

会 場 岡山中央公民館

岡山市小橋町(岡山駅前から市電東山行小橋下車旭川沿い) 百米

宿 題 第一部 事前投句 締切5月末日

「芸」 柴田 午朗選

「輪」 渡邊 蓮夫選

「山」 尼 緑之助選

2.5cm×21cmの句箋に単記無記名出句、封筒に住所姓号を明記して下さい。

第二部 大会当日出句 締切十三時

「時事雑詠」 大野 風柳選

「パン」 小松原爽介選

「流れ」 石原 伯峯選

「なさけ」 丸山弓削平選

表 彰 一部二部共二句宛(未発表作品に限る)
川柳大賞・大会賞

会 費 金一、〇〇〇円(発表誌呈)

第一部出句は会費と共に送付して下さい。

第二部は当日受付(但し第一部で会費送付の方は登録のみで会費不要)

投句先

556 大阪市浪速区大国町二一六一一

日本川柳協会川柳大会係あて

右川柳大会の前日(六月二十一日)に来
岡される方には、地元柳友による誘導で倉
敷市内観光(自由行動)吉備路史蹟めぐり
のプランを用意してあります。別紙然読下
さい。

主催 日本川柳協会

川柳 太平記 (25)

朱楽菅江と川傍柳

東野 大八

柄井川柳門中で異材の人物に朱楽菅江（一七四〇〜一七九八）がいる。朱楽菅江といえは太田南畝（蜀山人・四方赤良）唐衣橋州と並称される狂歌三大家の一人である。

彼が狂歌で名を成すまでは、牛込蓬来連のリーダーとして柄井川柳の川柳畑に打ち込んでいた。川柳の表徳は貫立。狂歌畑に身を入れる動機は、交友の深い蜀山人の家で、五人の狂歌仲間が集り、歌づくりを楽しんでいたが、川柳畑の彼はおいてけぼりをくっていた。かくて所在なきまま、眼の前の行燈に「われのみひとりあつげら貫公」と戯筆をふらした。柳号の貫立を俗世なみに「貫公の野郎」と洒落のめしたわけだ。のちそれが漢江となり、四十過ぎに菅江で落ちついた。

彼は元文五年生れ。御先手与力で本名山崎景貫（この貫の字から柳号が生れた）学を内山椿軒（実名伝蔵、字賀邸、牛込加賀町に儒学の塾を開く）に学ぶ。椿軒は江戸六歌仙の一人に数えられる歌人で、門下に歌道を教えたが、勉学の肩ほぐしにざれ歌を作らせた。門下には菅江のほか蜀山人、唐衣橋州がいた。

このため、ここから狂歌人が輩出した。菅江は二十五歳で妻帯したが、士分の出の妻女松子は和歌をよくし、夫から狂歌を会得し、狂名節松嫁々（不始末のかか）で女流狂歌人として名を成した。夫が寛政十二年六十歳で他界すると、孤月尼と号して隠棲。文化七年六十六歳で没した。菅江には約五十人の門下があったが、その大半は女性で、隠棲後も

よくその門下を支えた才女であった。菅江は、柄井川柳より二回り近く齢下だが柄井川柳の人柄を慕い、狂歌畑から師が死去するまで打ち込み、柳多留二十四篇に「玉柳」を添へ師川柳の追悼号を出している。

柄井川柳在世中にも、師の選評にかかる牛込御納戸町蓬来連の月並兼句をもつて刊行したのが有名な「川傍柳（五篇）」である。初篇は安永九年九月の出版で、彼四十歳の時である。第二篇は天明元年五月、第三篇は同年八月。第四篇はその翌年の八月で、最後の第五篇は天明三年六月に出した。つまり四年間に五篇もたてつづけに手がけたわけで、その五篇とも序文は彼が書いた。

「雪中の柳は折れそうにしてよしにする。」多き柳の其中に、平生柳の賞すべきは、夕浅草新堀のほとり川そひ柳なるべし（初篇）さすが一流狂歌人で学識充分、その「川傍柳」五篇の出来栄は、本家の柳多留以上との評価もある。特に同誌序文は、柄井川柳を陶淵明の粹詞「五柳先生」になぞらえたり、唐詩のうん蓄の深さを物語っている。また柄井川柳の死を悼む「追善玉柳」を柳多留二十四篇に加え、次のような師の追慕溢れる序文の一端を記している。

「年ごろ川柳の翁、俳諧にふけりて、年々の万句合の批判に及ぶ、その声調のこと獅子吼に等し（中略）」されど獅子吼歿して再び判の詞をくはふる人なし一云々」

―氏なくて兄はこわごわ馬に乗り

など菅江は約五十句を川傍柳で詠じているが、どちらかといえば狂句調のものが多く、この点、合点のいかぬのは、まだ在世中の柄井川柳がなぜ、衡学的な狂句臭の強い菅江の作品を選んだかという点である。

菅江は玉柳を最後に、川柳から姿を消し、狂歌一辺倒へと傾斜の度合を強めていく。

―菅江が碑に出額の丸の字（樽一三八）

―寒き夜は菅江のの字形で寝る（樽八七）

菅江は平がなの「の」の字を書くのに特色がある。如何なる場合にも必ずこの文字は、一段と線をつよめ太目に活達に書く。ために連中の名物となり、一名のの字の菅江。

狂歌としての菅江は、八年の歲月しかなく川柳の方にどちらかといえば比重が高い。寛政十年十二月六十三歳で死去する。辞世は

執着の心や沙婆に残るらん

吉野の桜 更科の月

この歌は向島三囲社内と小石川関の台の芭蕉庵の二カ所にある。阪井久良伎はこれらの

碑を清掃再建し、法名蓮光院泰安道父居士で眠る中野の青原寺では初の菅江忌を催した。時に大正十一年十二月十二日で菅江の忌日である。爾来この法要を十七年間続けた。

この菅江忌を催すに当り、往時の川柳人は久良伎が狂句を排斥したにも拘らず、狂歌師であり、狂句趣味の菅江を担ぐとは理窟にあわぬと攻撃したが、久良伎はこゝう反発した。

「初代川柳の人柄に傾倒し、川傍柳を出し数多の柳書に序文の筆をふるった川柳人菅江の遺徳を徳ぶのは当然だ」

柄井川柳の終焉を飾る柳多留二十四篇の付録「玉柳」は、菅江が力のこもった柳誌最後の序文を書き、和笛、葉十とともに菅江も句選に当り「川柳追福三評」をものした。

これに対し追福の協賛供句を行ったのは、雨譚、石斧、玉簾、洗路、素鳥はじめ十八名の往時一流の点者達が挙つて加わつた。

余談だが、柄井川柳は往時の点者中でも雨譚を最も嚮望し、生前老衰を自覚した際、わが柳門の後継者は雨譚と期する節が多い。

その例に「やない筈」がある。この柳誌は雨譚が率いる麻生柳水連の句集で、天明二年から毎年板行され、天明六年春までに四篇を出している。その二篇（天明三年板）は、雨

譚の実子李牛永眠の追悼句会の特集号で、珍らしく柄井川柳が悼吟を寄せている。

―今頃は弘誓の舟の涼みかな 川柳

これと並んで雨譚が「亡児李牛を悼む」としてつぎの句がある。

―親骨の思えば強き扇かな 雨譚

柳多留十六篇の扉を除いて、あれだけ大部数を誇つた柳多留の中に、辞世さえも残さなかつた柄井川柳の句が、「やない筈」初、二篇に数句を寄せているのは、その肩入れの仕方が判ろうというものだ。

「やない筈」のほか「菘姑柳」（天明五年麴町梅連板）や「柳籠裏」（天明四年麴町高砂連板）があるが、柄井川柳の句選はあるが作品は見当たらない。いずれにせよ、柳多留二十四篇の付録「玉柳」によって、柄井川柳三十四年間の川柳生活は、ここにめでたく終止符を打ったわけである。

初世柄井川柳が、往時そうそうたる点者や作句の名蹟によつて盛大な追善をうけ、後世までその表徳をもつて一文学の名称として世に残つたのは、川柳自身の人徳もさりながら呉陵軒可有、花屋久次郎の優秀な両者の手腕と、朱楽菅江はじめそれを取圍く戯作者、板元、浮世絵師の絶大なバックアップによる。



鈴木 黄

俳句研究 五篇 柳多留廿五

— (二九丁) —

西原 亮・鈴木 黄・室山 三柳
入江 勇・清 博美・八木 敬一
紀内 恒久・青木 迷朗・故岡 田 甫

529 暦見て机をなす長閑やかさ

西原 〓 書初め。机を恵方に向け書初めをする
入江 〓 「直す」は修理する。今日は大工仕事
はどうかなと、暦をめくってみて、それから
机を直す。春日遅々。当時は棚一つ釣るにも
暦を見たもの。

八木 〓 机の置き所を改める、のではなからう
か。

青木 〓 入江氏説賛。書初めでは「暦見て」が
変ではなからうか。書初めは正月二日と決つ
ているから……。

岡田 〓 「のどやかさ」からすれば、やはり礎
稿のような意か。昔の暦には毎日の記述に
「……によし」と書いてあり、昔の人はそれ
によって行動したので、書初めなども元旦と
は限りませんでした。

530 美しいうけで国からしばらく

西原 〓 国家老登場 芝居の「暫」をあしらつ

た句。「美しい受」は側妾で、殿はぐにや大
名となる。

つきまとふ狐を放す国家老 二六・35

室山 〓 賛。「うけ」は歌舞伎用語で、礎解の
ごとく歌舞伎十八番の「暫」の主人公が相手
とする悪人。「うけ」の家来は「中うけ」と
いう。

入江 〓 同。「受」は受役（敵役）で礎解の通
り妾をさす。

しばらくの声なかりせば非業の死

拾九・1

しばらくがあたまをみんな横につけ

拾九・2

岡田 〓 同。（見物はみな花道の方へむく）

531 錦着る所存で紅葉わける也

西原 〓 正燈寺の紅葉見を口実に、吉原へとの
魂胆。錦は吉原オイヤンの衣服、夜具のこと
で、紅葉との縁語。「猿丸太夫」の文句取り。

逆の場合、

吉原と云つて出るのは正燈寺

安七桜 I

入江 〓 「錦着る」は、百人一首の、
をぐら山峰の紅葉は

心あらは今ひとたびの……

おくやまに紅葉踏分

なく鹿の声……

此たびはぬさもとりあへず

手向山紅葉のにしき……

のいずれか。最後の「紅葉のにしき」をとり

たい所。

八木 〓 賛。

よし原はもみちふみ分ヶ行所

岡田 〓 礎解に賛。

七・36

(三十丁)

532 伯父様が常の坐敷にして帰り

鈴木 座敷らう時にはんれい伯父きなり

(拾四・24)の句のように、「どら息子にとつて伯父様は將に越王勾踐に對するはんれいのようなもので、天の神、伯父様の口添えで親仁の勤氣もとれて、やつと座敷半から出された。それにしても江戸時代の親の権力の絶對さには驚くばかり。

伯父の目にもなみだ座敷らうのわび

二〇・15

室山 贊 意見するの、座敷半へ入れることについて意見を述べるの、みな「伯父」で、「叔父」の方は、

雪の朝叔父伯父が寄っている 傍一・29

くらいである。やはり父もしくは母の兄という貫祿であろうか。

座敷らうばん頭なきにしもあらず

二二・38

岡田 同。

533 大相な竹箒出し帳をうり

鈴木 によくわからないので、駄落解を、十二月十三日の煤払いの日に、古くなった「とはり」のほこりを、大きな竹ぼうきではたいて、古物屋に売った、というのでもあろうか。

室山 帳屋の看板である。笹竹に張子製の大福帳をつり下げたもの。その笹を「竹箒」に見立てたのである。

梅に鶯竹にハ帳面也

傍三・22

入江 室山氏説贊 帳屋。今なら文房具店である。

岡田 室山氏 明解

534 なんとよこれハしまいかと翁いひ

鈴木 芭蕉の句に、

いざさらば雪見にころぶ所迄

いざ出むゆきみにころぶ所まで

これをふまえての句。翁は松尾芭蕉。

ころぶ所迄行けば手足や衣服は当然よこれしまつてあろう。

膝や手をはたいて翁かへるなり

二五・19

室山 贊 「いざさらば……」の句に関する

川柳は実に多い。

青木 同。

転んでも汚れぬへのが名句なり

三二・15

わざと転びに出たよふな名句なり

三九・35

岡田 同。但し、つまらん句。

535 羽子の子か松へとまると嬢ハにげ

鈴木 江戸時代の正月風景の一こま。松は正月に戸毎に飾る門松・松飾り。

羽子の子をつきすてにして嫁かくれ

八・22

羽子板を預けて帯をしめなおし

初・33

とつてくんなと羽子板を胸へあて

室山 贊 例句第一句で説明ずみとなろう。

一八・30

いたすらをした子供に似た心境の嫁の無邪気さ、初々しさ。ただし「松」は門松でなく、庭の松か堀越しに出ている松の枝であらう。

八木 松は、門松でいいのではなからう

か。また嫁が逃げるのは、墨をぬられるのがいやだからではないでしょうか。

紀内 八木氏に贊。やはり墨をぬられるからであらう。

青木 礎贊。松は門松が適。「逃げた」のは責任のがれの方が強そうである。

岡田 同。

536 はね虫に妾まぶたをすハせてる

鈴木 「はね虫」は「広辞苑」によると、は

ねる虫。とびむし。かるはずみな人。とある

が、句の「まぶたをすハせてる」が何を意味するか、サツパリわからず。

岡田 難句。残念ながら宿題。

537 こしもとのいたすら狎を富士ひたい

鈴木 暇があるので、腰元がかっている自分の狎のひたいを墨で黒々と富士額にしていたずらしている。何か欲求不満でもあるのだろうか。

なぶられた腰元ちんをけしかける

安元・札3

くじらせた腰元ちんをけしかける

末三・7

室山 贊 「富士ひたい」は美人である。白

黒の狎の黒の部分延長したのであろう。

青木 同。「腰元がかっている狎」とするよりは、「女主人(側室)がかっている狎でな

からうか。

岡田 若い腰元らしいイタズラ。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 55年 1月号
至 55年 4月号

路郎賞候補作品

(到着順)

正本水客

若本 多久志

柿食えば秋だ秋だと歯が答え 大原 葉香
スープ皿あたたため夜の平和くる 榊 みどり
地球儀の何処をついても血が出そう
何となく師走の流れについてゆく 松川 杜的

子に賭ける夢ある限り春遠し 江城 修史
日の丸に換える国旗のない誇り 川口 弘生
萩の寺女の業を埋めにゆく 河野 君子
初日出有為転変へ身構える 野村太茂津
責任の重さを靴も知っており 黒川 紫香
どの紙幣も倅せなんて書いてない 鈴木村諷子

寒風に咲いて水仙寒がらす 津田 与史
片道の人情でよし満ちている 内芝としよ
一事には触れず母娘のひそと住む 川崎 秋女

想いはるか賀状にこもる愛を抱く 林 瑞枝
岩砕く水方円に逆らわず 林 露枝
あきらめて沈めば石のやすらぎよ 嘉数千代香

方円に従う水にもある迷い 浦野 和子
こたつから積ってほしい雪をほめ 高橋操子
みね打ちの愛は急所をみな外れ 両川 洋々
会者定離 海までは行く川の旅 八木 千代

桜餅葉っぱは妻の手に戻し 津田 与史
真先に賢い人は馬鹿になる 堀江 正朗
素顔なら貴女が一番美しい 工藤 甲吉
まだ夢のつづきでパンを二枚焼く 本間満津子
善後策楽親組は箸をとり 八木千代
言いたいことあるまま夫婦三月過ぎ 出原 敬一

便箋一枚ととも重たい父の遺書 小出 智子
憶病な男の財布は空にせず 西山 幸
ぜいたくな一日部屋にバラの束 宮西 弥生
廻れ右出来る男の憎い足 高橋 夕花
後は知らん顔蜂の巣をつ突く 若柳 潮花
西川 善紫

橘高薫風

秋茄子が転がっている土間の冷え 若柳潮花

逆らった娘が生む孫の名を付ける

ああ平和むすこに抜かれた背の高さ 山本規不風
愛蔵書売れたら売る気古本屋 塩満 敏
ここまでは人真似でもこられたが 金井 文秋

泣き虫へ大山白く喪に服す 大坂 形水
酒徒ある日男はもういなと想う 高杉 鬼遊
真心の彩濃ゆからず薄からず 森井 菁居
会者定離海までは行く川の旅 本田恵二朗
晩年の味方は一人あればよい 八木 千代
大手術控え見舞いを笑わせる 小島 蘭幸
宮川 珠笑

西尾 菜

人信じかねて落葉をかき集め 西村 早苗
ライターの炎で孤独慰める 福浦 勝晴
老人をタライ回わしのテレビ切る 不二田一三夫
靴すべり渡して手綱ゆるめなない 小西 雄々
束の間の中流気分羽田着 神谷凡九郎
或る時の僕惑星の軌跡持つ 浦野 和子
釘一つか忘れてる自画像で 内芝としよ
人の真似するなと猿は子に襲け

鬚気楼のような山腹に浮く団地
病院の顔役になる附甲斐なき
ほとけさまに嫌われまいと櫛を持つ

八木 千代
松川 杜的

ドラマの病氣もガンが大はやり
ウイंकしたままでだるまは忘れられ

打首も獄門もない世の乱れ
ギャンブルに走れと総理大臣賞

うしろ指寒い話にしてしまふ
堪えかねて二月の花に水をやり

女と妻のあいだで好きな彩を着る
ウインドウ透かせば糸毛の総毛だち

児童年言葉が欲しい知恵おくれ
血圧を薬でなだめなだめ生き

玉三郎女を煎じつめて見せ
へんくつで通るたしかな腕をもつ

老妻がいつしかいふし銀に見え
給料の軽さになれた靴のちび

しゃばん玉空に溶けても生き延びよ
素人に読める書道は選に洩れ

月へ飛ぶ夢は忘れぬ竹とんぼ
点と線けじめをつけてまだ独り

川村好郎

八木千代

菊沢小松園

岩田 美代
高橋 夕花
小出 智子

河野 君子
中村ゆきを
金井 文秋
仲どんたく

杉浦婦美子
小西 雄々
高杉 鬼遊

八木 千代
遠山 可住
香川 酔々

宮西 弥生
傍島 静馬

へちまゆらゆら酔生夢死の一生か
傷心へ神は時間という演技
高官の誰にやろうか演技賞

あきらめて沈めば石のやすらぎよ
猿芝居の猿の姿を笑えるか

女と妻のあいだで好きな彩を着る
どんな顔したらほんとうの僕の顔

この絆緩めてほしいときもあり
バラの朱よ荒野へ炎える意地を抱く

どの紙幣も倅せなんて書いてない
自分という小言は甘い言葉撰る

川柳塔賞候補作品

黒川紫香

片隅に置かれてしまった母の膳
雑草に我が生き様を笑われる

きつかけを掴めば廃車も動き出す
蝶々を飛ばしてみたい春を描く

石段に椎の実ひとつ秋拾う
シャッターを下して私の灯をともし

熱帯魚水藻にからむ私語のあわ
新聞をたたんで今日へ向き直り

時刻表せめても旅の香にひたる
歯が痛いので決断が早くなる

父親の抜け殻がある日曜日
アンテナを立てて女の立ち話

シャッターを下して私の灯をともし
ポケットベルが邪魔をしていた適齡期

0歳の瞳の中にいる私
渡り鳥善人に会うコース選る

植え終る日を出稼ぎの日と決める
墓洗うどの子の影も崩れない

巣立たせて時計夫婦の音になり
太陽はここにも小さい影がある

戸田古方

寂しさはわたし何しに立ったやら
病人に相槌打って欠伸でる

文化とは他人の身にもなってみる
アンテナを立てて女の立ち話

病葉のいたわり合うて吹きだまり
アフガンもイランもあらず愛猫と居る

把手の片手を春が離させる
飛石をならべたような冬の川

人間に還れば田い声になる
気どらずにそのままのまま福笑い



菊沢小松園選

鳥取市 森田熊生

笑わせておいて最後の策を練る
見栄捨てた冷や酒うまいのに気付き
忘れたい過去は砂丘にうめてくる
腹の立つ話へ桜やけに散る
スト三日線路が鉄として錆びる

長崎県 岩崎和子

傷口を見せて気がすむお人好し
他人事でなかった事実背負い込み
努力家も愛のもつれはもてあまし
アルバイトタイムカードがなつかしい
太鼓腹支店代理にある人気

京都市 山本桐下

ふと聴いたワルツに父と母が居た
枯野から花野へ移す原稿紙
鯉のぼり補導した子を直泣かす
なにげなく子の押す車椅子に姉
勝った日の星は流れるかも知れぬ

柏原市 小谷葉子

四季咲きの花の心にさかろうて
四十代の風にならされ水中花
たとう紙の中で切り札温めてる
落花しきり心むしばむ寒椿

岸和田市 津田千舟

夫婦とも商売人で低い腰
戦後派に野麦峠は解しかね
誘われも騒がれもせず嫁き遅れ
三千万夢かき立てる宝くじ

鳥取県 武田照子

柔道を習っている手で肩もまれ
嘘少しませると話円くなり
故郷の山目じるしに帆を上げる
宿の湯気主婦と云う名を忘れさせ

米子市 雑賀美世

二次会で幹事気楽な酒となり
赴任地の夢を拡げる地図を買い

山頂へ思い思いの道で着き
もう立てぬ老父へ最後の靴を拭く

呉市 山根里香

ふる里のニュースが春の音でくる

鍵穴から鬼の本音を見てしま

子育ても終り埋れ火炎えはじめ

慕いあう鈴に掟が破れるか

島根県 星野侑正

注射打つ看護婦さんにも上手下手

点滴よ僕の血管かけめぐれ

蒸しタオルまだ入浴は許されず

大阪市 白石潔

老妻の白髪に気づいた定休日

話題くるくるいつ終るのか女客

故里も小川サラサラとはいかず

大阪市 小谷清女

法話きく真赤な爪で数珠を持つ

逃げ道も開けて聞いている面構え

無事平穩どの子も梨のつぶてなり

島根県 松本文子

春の貌写す湖生きている

哀しみをそらす話題が見つからず

しあわせはすがって泣ける人がいて

大和高田市 岸本豊平次

禁煙にチュウインガムの噛み疲れ

ハイウエイ防音壁を見て走り

緩急の時があるのか自衛隊

大阪市 鍛原千里

屋上の植木鉢にも春が咲く

連休にせがむ子もなく当てもなし

卒業式ほのかな恋も置いてくる

大阪市 村上田鶴子

いい夢を見たくて今夜は早寝する

来世もと爽やかに嘘ついて見せ

縄れ糸いくどほぐして来た夫婦

大阪市 西村芙佐女

激流をかばう夫婦の竿さばき

夏祭り金魚にばけた孫がふえ

いきな裏見せてコートをとくと置く

東子市 小山悠泉

故郷がぶーんと匂う木の芽あえ

子に美田残さぬ父の思いやり

バイトした金の旅行は叱られず

今治市 渡辺南奉

逢うて来たほてりを風よ消さないで

子よ妻よ地球の自転信じよう

何故好きと言えぬ月だけほめるだけ

三重県 川上溪水

合格発表いろんなドラマが交錯する

疑えばみんな怪しい位置に居る

過去の僕今の僕には笑えない

尼崎市 中谷利美

死水はわたしが取ると妻のんき

上げ足を取るから話し難い人

医者替えて替えて治らぬ胃の調子

水澄んで逆さに春を写すダム

ピルの下こも昔は海だった

通りから路地から朝がうごきだす

白無垢を着せて恥じない娘に育ち

省エネがけちをすんなり受けて立ち

坊さんの衣に流行ない気楽

ポケットへ内緒の頼み押込まれ

黄砂舞う陽気がけだるさ誘い出し

二次会で男ほんとの顔を出し

かたくなに護るズボンの折返し

表札のない家でツバメ巣を構え

明日も雨でしょうと停年過ぎた人

人形にならねばならぬ夜の蝶

お化粧の紅ひかえめに参観日

まっすぐな人でついているすぎがない

御祝儀と書いても額にまだ迷い

腹立てて見ても叶わぬ多数決

銀行がうるさいうちはまだいいさ

転がしてみては種芋撰っており

田螺取り雛に供えるだけでよし

断っておいて山椒の芽を盗む

ぶの悪いところは盲点たてにとり

運転手ガイドにあわす走りよう

男世帯造花で今日を我慢する

本心は言えぬまんまで夫婦いる

本心を素直に言うときき当り

前例で処理して火の粉かぶらない

病窓から鳩の肥満よ水ぬるむ

つまずいてまたつまずいて女坂

「大安」が雨に濡れてる退院日

先ず馬を射る戦法は今も生き

蛙の子井戸には住めぬ視野を持つ

世帯持ちよくて羊羹固くなる

病む窓にも春が来ている雲のいろ

女です無色でおれぬ夜もある

謝りに行く階段が反りかえり

島根県 角 耕 草

熊本市 北 川 一 進

今治市 矢 野 佳 雲

広島市 光 井 み ほ

出雲市 園 山 多 賀 子

鳥取市 中 森 葉 士 人

新宮市 辻 式

差し向い本音はガラスの底にある
道説いて坊さん地獄へ落ちそうな
真つすぐに流される事のむずかしさ

倉吉市 今村夕路

冷笑の顔に心のトゲが浮く
変身の蝶は昔をしゃべらない
ことさらに嬉しい返事長くなる

旭川市 朝倉大柏

言わずともわかってくれるなど甘い
夫婦なんてこんなもなかなかと古い
顔だけで見ると言っても蜘蛛は蜘蛛

米子市 青戸美佐

おしゃべりと無口でたどる人生譜
花便り一せい値上げつれて来る
袴あしと足袋の白さにふり返り

熊本市 有働芳仙

美しく悲しくドラマすれ違い
散ることを知らぬ造花の悲しい日
床の軸変えて見合の座が決まり

大阪市 野田君枝

さっそうと女駅長笛を吹く
春場所も野菜不足のちゃんこ鍋
用心だ人には言うな当りくじ

吹田市 藤原世史春

結局は物価を上げるストをする

遵法というスト罷り通るなり
コマーシャルなんでもうまい味をつけ

弘前市 田中叶

釣り銭が出ぬ真夜中の販売機
越して来てまずは釘抜き釘を打ち

寝屋川市 高田てまり

中年の魅力は財布の中にある
贅沢に馴れた女が瘦せたがり

大阪市 西出英子

春うらら何はさておき花に酔う
物想い樂觀的にさせる春

堺市 大道美乙女

二人して屋台もひいた立志伝
出雲まで出かけた甲斐で結ばれる

和歌山県 時田誠一

宝くじほんとに当たる人もいる
人生の切符行先書き書いてない

尼崎市 小林文月

NHK SLの煙うまく撮り
新夫婦ふたりで作る献立表

青森県 波ただお

春の海のたりのたりといかぬ世相
いとこへ来ればCM顔を出し

兵庫県 伊沢午郎

御主人の寝た間も稼ぐ販売機

びったりと合つて既製服買わされる

唐津市

田口虹江

大阪市

花岡千世子

五輪の火外野で騒ぐ程燃えず

ホラそこに春が来ている柳の芽

唐津市

仁部四郎

米子市

三戸静絵

カネずくの学歴あとで消えぬしみ

ランドセルおやつすむまで転がされ

唐津市

山下勝一

和歌山市

坂部紀久子

親切も過ぎては痴漢と間違われ

父母の夢入れて背負つたランドセル

倉敷市

中島彩平

岡山県

柳原孝柳

停年まで吾が人世の指定席

春愁に親爪少し剪りすぎる

出雲市

吉岡きみえ

大阪市

土屋雅洋

交通禍とび出た蛙ひきころし

なみだが落ちそうだから空をみる

大阪市

横山静子

大阪市

橋元美恵

満期来た保険へ夢は消えている

老眼鏡皺かくすしかとからかわれ

大阪市

杉本智慧子

出雲市

石倉芙佐子

蒔いた種たしかに土に根をおろし

スカートの子婦人警官隙がない

大阪市

鈴木節子

兵庫県

山根左春

行きずりの花も私を見つめてた

水たまりびちやびちや子等は夢を追い

記念碑が建つて名所が一つふえ

浜田市

佐々木裕

お彼岸の入りから寝込むばちあたり

老いてなお女らしさもあつてよし

食通もやむなく冷凍カニにする

老いて行く炎をもやす灯は消さず

春うらら誘い出された油虫

「ただ今」の後が気になる初出社

ブランコにひとり揺れてる春の風

時々女が小川で手を洗う

七光末っ子までは届きかね

演歌でも女は無口が良いと言ひ

友に会いフランスパンが邪魔になる

成長の区切りのたびに金がいり

こめかみに男の嘘が浮いて出る

人妻の心へとどけ風の音

兵庫県

山根左春

当用の恋と云う字は軽すぎる
母と娘の会話へ父の余地せまく

八戸市 島田昭治

どこがどうと言う訳でなしウマが合い
明治村偉人ひよっこり出る気配

米子市 菅井未知

かじられる時だけ親の威厳見せ
末っ子がとうとうあげた鯉轍

和歌山市 堀端三男

焼け石に水でも年金のあがりかた
満期まで長生きしますと勧められ

兵庫県 野々口ゆう也

あきらめの妻の溜息からみつく
火のおんな某月某日それつきり

大阪市 平井露芳

借りもののパンダで神戸人を呼び
八百年眠り定家蔵で覚め

鳥取市 武田帆雀

前歯では潰せず奥歯では切れず
敗戦の雄カメラアップせぬ情け

島根県 福岡芳枝

湯の煙わがいきざまを見せて立つ
妥協せぬ昔の夫の癖笑う

豊中市 満仲きく子

よい返事それがわたしの取得どす

天中殺これで婚期がまたのびた

大阪市 藤森小雅子

感情に走って歳を恥じている
故郷に甘えに帰える母がいて

名古屋市 越村枯梢

佗しさは昨日も今日も干物焼く
芋掘れば僕そっくりの顔も出る

米子市 桑原伊都

茶の欲しい合図か老父の咳ばらい
独占のマイクで酒の座がしらけ

鳥取県 和井観洋

温室の花で奇麗に騙される
嘘吐けば背中のほうが冷えてくる

岡山県 池田半仙

背伸した旅に財布もグロッキー
悪友も時に救いの神になり

寝屋川市 福富隆子

大学に議会にまでも盗む人
悲しさは夫が優しいことを言う

高槻市 竹内花代子

慶弔に追いまくられて春が済み
喪の彩が私の似合う彩らしく

富田林市 中村優

全集を書棚で眺めまだ読めず
巨匠という額で裸婦像正視され

熊野市 上垣内 利 凡
正三角一つ転がし今日終る
つまりいた石で築いた今日の地位

羽曳野市 麻 野 幽 玄
御先祖の庭を潰して車庫つくる
孫ほめる割りには嫁に触れぬなり

鳥取県 宮 脇 銀 嶺
胸の内明かせば妻が他人めき
省エネと油不足の渦が巻き

広島市 す が かつこ
女ゆえ針穴のぞく業火たり
からすなせ鳴く針千本の遠メガネ

町田市 竹 内 紫 鏑
火葬場が近くで壺はもう置かれ
カラ出張ではないみやげ配ってる

大阪市 岩 田 八文銭
もう一つ苔をつけたい景と見る
指名され歌は気持と程遠し

和歌山市 細 川 幸 代
朗報がつづいて家計簿狂い出し
台所の隅で本音が割れる音

東大阪市 三 宅 哲 夫
古物からあすへのヒント陶芸家
鯉のぼりおらが天下の五月晴れ

広島県 砂 田 静 佳
倒れても起きろとダルマ睨んでる
戸締りに廻れば裏の梅匂う

岡山市 串 田 句味地
変更はしません轍が笑います
聴き上手明日の照る日を信じきり

島根県 園 山 栄
こだわっていても日向に向く若芽
仮面いま捨てると過去が一つ増え

倉敷市 大 森 登 竜
芽の出ない男一匹麦を踏み
京都府 京 都 市 松 川 芳 子

羽島市 伊 藤 静 枝
カラオケの癖がマイクを持ちたがり
おさな子のそれなりに溜め宝箱

倉吉市 野 中 御 前
共稼ぎ少年Aの出来心
大阪府 大 阪 市 林 ひろ子

榎原市 西 本 保 夫
桜にも苦手があつたストと雨
定年のボクにどうにかなるゆとり

島根県 木 村 はじめ
譲られた善意の席にある温み
東広島市 石 井 さわ子

唐津市 桑 原 掬 治
税務署の椅子は何だかかたい椅子

凶に乗って浮んで死んだ深海魚

唐津市 浜本義美

鉢巻きで追えば物価が引き離し

唐津市 木塚素石

初給食いやなものまで箸をつけ

大阪市 岡田ふみ

商魂におとうふ煮いて稼ぐ寺

尼崎市 中辻千子

うれしさは見捨てた挿芽が息を吹き

広島市 片岡千鶴子

共稼ぎ切手貼らない置手紙

岸和田市 吉水照江

世相とは別にかかわりない土筆

大阪市 本多俊子

連翹の枯木とみせて咲きほこり

今治市 新居田胡頼子

健康を奏でる春の風を浴び

尾鷲市 渡辺伊津志

よく動く男のチャック開いており

鳥取県 羽津川公乃

方便の嘘にも善人汗をかき

出雲市 板垣夢酔

泣く奴があるかと涙声がいう

泉佐野市 大工静子

行く筈がないからおいでとしめくり

子算外支出の多い新学期

高知県 山下登舟

釜ヶ崎前歴不問の雲ながれる

大阪市 大野武太

車中にて手話美しい手が踊る

山口県 高崎喜一

猫柳樹水の中で背を丸め

奈良県 大寛直木

めざましく酔いすぎました千鳥足

大洲市 米沢暁明

夜桜へみんな気が乗る暖かさ

新入社もう朝寝ぐせすつとんだ

(前月号分)

また鯉が一つ届いた初節句

老人の皺はのみではほれぬ皺

アイシャドウなければ好きになる女

風習に馴染んだ頃にまた異動

岐阜市 市川鱗魚

ぬけぬけと裏切る文字のボールペン

売る道は開けとく農地法のザル

生活成り立たぬ紫水に鮎がすむ

御時世の中で農婦のハイヒール

外遊の話隣りも田を減らし

作品へ影響を与えるもの

随想風に

山村 祐

(2) 句と風土

風土について考察をすすめるとき、学問的にはいろいろと難しい問題が含まれてくると思うが、ここでは常識的に、地域性と歴史性とが絡み合つて、人間存在のあり方を規定してゆくもの、という風に解しておく。その歴史性には社会状況が重く作用することについて前章で少し書いたが、ただ現象面に触れたのみであつた。その根底には農耕社会を基盤とする封建末期の状況——農作物生産の上にあぐらをかく武士の支配体制崩壊への予感とか、農民の犠牲の上で成立した江戸という消費都市の末期的繁栄とか、そのなかで経済的優位を占めた新興階層の町人文化の成熟とか、一方に於ては武士の支配体制の基礎である農民階級の絶望的な困窮とか種々複雑な要素が渦巻いていた。

社会の生産力の増大は人口の増加をもたらすが、近世初期の日本人口は約二千万人、近世の前半には一千万人ふえて三千万人に達した。しかし後半の百余年間の人口は増加するどころか、数回に亘る大飢饉の年などは反つて微かに減少するほどであつた。この事実からしても、封建社会の生産力頭打ちの傾向は明らかで、社会が停滞期に入つていたことが窺える。

そうした社会的な状況の影響のもとに、古川柳も年代が降るに従つて、次第に創造的気力は低下してゆき、現実逃避の言葉遊びの観念性をもつてあそぶ狂句へのめり込んでいったのであつた。

次に風土の地域性を考えてみよう。

私の知人に、半生を蒙古で過した老人がいる。敗戦時は満州国蒙古省の要職にあつたの

で、ソ聯邦の捕虜として数年間の抑留生活を経験してきた。中央アジアのカガンという小さな町で捕虜生活をしていたとき、淋しさを紛らすため、素人の俳句会を仲間たちと始めたが、そのときの句を示してくれた。

蒙古野の若芽に集う仔牛かな

可寒

凡々たる句だが、その作句意図を聞いて驚いた。作者の思いには蒙古の原野での生活があつた。天幕で家畜を追う遊牧生活を送る蒙古人にとって、冬は誠に困苦に満ちた季節である。放牧の羊や牛や馬は食糧を十分に得ることが出来ないで、ようやく冬を越して三月四月頃ともなると、アバラ骨が見えるほどに痩せ細つてしまう。その頃強い寒い風が吹くと、特に羊や仔牛馬は抵抗力が弱いため夥しい数がバタバタと倒れてゆく。そのよう

な極限的な状況のなかで、家畜たちは餌を得るために、前足で必死になって土を掘る。地中の草の根などを探して喰べるより生き残れる道は残されていないのである。

そうした特異な状況がこの句からは全く窺うことが出来ぬ。もし幽かにでも感じとれたら、句は見違えるほどに活々とするに違いない。折角の素材が活かされなかったのは、その風土性が活かされていないからである。

更には、避地に抑留されているわが身の囚われの姿が、痩せ細った仔牛の姿と無意識のうちには二重写しとなって感じられていたのに違いないのだが、その非痛な思いも摺えられずに終わったということである。

ここに語った風土は、人間の生活と無縁に存在する単なる蒙古の自然ではない。人間の繋り合いのなかでの風土の地域性であり、歴史性であり、社会性の入り混ったものである。

北海道から沖縄までの長い地形をもつ日本は、その内部にじつに豊富な郷土芸能などを抱えている。それらとともに、各地の方言は、風土を考えるとき、忘れることのできない重要な文化遺産である。方言の与える切実さと独自さとは疑いもなく深いものであり、郷土人にとつて、それは歴史のなかに流れ、生活を流れて、胸底にまで響く肉声である。

テレビすうすうばか うわあんだんがいが

下地広志

名前から推察すると、下地氏は沖縄の宮古群島の下地島か、その周辺あたりの出身かと想像されよう。私も一〇年前に下地島を訪れたことがある。昔は三〇戸ほどが住んでいたというが、私の訪れた頃は僅か三戸に減っていた。たしか電燈もなかったように記憶している。他の島々と同様に過疎化の烈しい小島であった。それに隆起珊瑚礁の荒々しい岩原が広く拡がっていて、荒涼とした感じであった。

三軒の離島（はなれ）の人家百年の燈

祐

沖縄市（旧コザ市）在住の俳人野ざらし延男氏は下地氏の句を次のように鑑賞する。

《テレビ白ら白らしい暮 貴方はどこへ行くのか（中略）自分の風土と生活の根を持続し、体制の波に押し流されることなく、肉声を核に生きている。テレビは一億総白痴化の元凶だ。画面を流れる白々しい映像はヘド口群だ。幕場だ。視聴者よ、貴方よ、どこへ流されてゆく？》

沖縄の言葉は日本の方言のなかでもリズム感が特に豊かなので、意味の解らぬまま読んでも魅力的ではあるが、しかし解説を聞かないでは内容は全く解らない。方言句の泣きどころであろう。方言のよさをどのように残せるか、伝達性をどのように考えてゆくのか、その努力と研究が必要である。

一行詩ではないので同日には論じられない

が、私は沖縄の北島すみ子さんの独り芝居「島口説」を聞いて深い感銘を覚えた経験がある。「私自身カンポーって北島ヌクサー（艦砲の喰い残し）」と言っている北島さんの、三味線と歌、踊りを交えながらの、沖縄戦から祖国復帰までを語る一時間半の独演に、私が没入し感動し得たのは、沖縄方言のよさを出来る限り残しながらの眼に見えない苦心があったからであろう。

野ざらし氏の下地作品の解説を読んでみてそこで始めて下地氏の胸中の風土が、テレビの向側に逆反射的に感じとれてくるのとは、異質な対象をなしていると思う。

季節季節の自然を透して思いを訴えてきた俳句は、多湿多雨の列島に住む日本人の、季節の移り変りへ敏感に対応する詩として、日本独自の詩風を育てた。自然詩として育った俳句と較べて、都会詩として人情風俗を覚めた眼で描く伝統を負う川柳人は、風土への関心はやや薄いように思う。私たちは手近に存在するそれぞれの風土への関心をもっと高めてゆくべきではなからうか。地域的な歴史的な社会的な風土の特性を探る眼から、他処では決して生れてこない独自の作品が育つてゆくと思う。

句と風土の関わり合いの深さを思わせる現代川柳作品を探ると、例えば東北や関西の作家に特にそれを感じている。これから考えてゆきたい重いテーマである。

愛染帖

橘高薫風選

青森市 青森市 工藤 甲吉
 色即是空色即是空落椿
 天上の白い精霊こぶし咲く
 倉敷市 水粉 千翁
 さつきばれ彩ことごとくしたたりぬ
 大阪府 小出 智子
 見下ろせる高さ身動きならず住み
 大阪府 葉さくらや女同志がいつそよし
 花葛蒲女に勇氣のいることも
 大阪府 河野 君子
 花は散つてのひらにある葉包紙
 八尾市 高橋 夕花
 憧れはうつろいやすきものばかり
 花散つて水襲すこし満ちてくる
 島根県 堀江 正朗
 嫂にこころもらいし葉さくらよ
 嬉しいとき嬉しい音でひたい打ち
 鯛焼きのあんこが熱い花の下
 今治市 月原 宵明
 極彩の風に仏像目をつむる
 第三のわたし鏡へ笑つてる
 米子市 八木 千代
 ふと見れば桑山子に二本足の影
 泣き切った胸から洩れる数え唄

倉敷市 田垣 方大
 表情のある海に見え恋を知る
 枯れかけた夫婦になつて頼り合い
 高知市 西川 富恵
 昼の蛍悲恋に終る人なのか
 やさしさをください雨に濡れた胸
 京都市 都倉 求芽
 儲けてはる膝のふくれたズボン着て
 タテの鍵ヨコのヒントで今日も生き
 町田市 竹内 紫鏞
 ルームランナーいまは踏台にもならず
 声高に主従乗り込むエレベーター
 京都市 山下 桐下
 母さんさえ泣かねばどんな絵も描ける
 又秋刀魚かいなど言おうとして言わぬ
 富田林市 中村 優
 明暗を二つに割つて花と旗
 おやじの海唄い中年肩を抱き
 富田林市 岩田 美代
 四月馬鹿男のレールに石を置く
 花霞ますます素顔見せられぬ
 岡山県 嘉数 千代香
 云い足してまだ云い足りぬけものみち
 企みの記事へおんなの血が炎える
 今治市 矢野 佳雲
 寝返りをして本来の寝相なり
 仕合せかと聞かれてノーと言いかねる
 岸和田市 古野 ひで
 鉢植にされて野すみれかしこまり
 落椿さだめを悟りいさぎよし
 兵庫県 奥野 テル
 老梅の乏しき花は幹に添い
 老いらくの思慕を抱いて湯の宿へ
 米子市 青戸 美佐
 老い深く日々を怖がる齢になり

人生の節大切に暦持つ
 大阪市 北 勝美
 赤鉢巻廻転椅子を軋ませる
 和歌山市 桑 原道夫
 扉の女もいま鉄橋にさしかかる
 和歌山市 浦野 和子
 若い日へ逆さにまわる花時計
 尼崎市 黒川 紫香
 人間がかぶれば恐くなる仮面
 大阪市 清水 健司
 替り身の早さ天職信しない
 島根県 西村 早苗
 美しいラスト真ん中を行く
 大阪市 小谷 清女
 無口でもないのに無言の夫婦なり
 和歌山市 内芝 としよ
 山の恋山で終つたさわやかさ
 倉敷市 小幡 里風
 猿が木をおりる人間樹に登る
 平田市 久家 代仕男
 土筆ン坊こんな憂き世と思わざり
 島根県 堀江 芳子
 飲み疲れそつとしておく春炬燵
 高槻市 若柳 潮花
 朝の山光と影の像を見る
 川西市 戸田 古方
 風致地区にぼつかり地下鉄出入口
 ホノルル市 前山 北海
 一世の恩義に二世そつぽ向き
 唐津市 仁部 四郎
 不合格明日は山中鹿之介
 米子市 林 瑞枝
 衣食足り過ぎて砂漠となる日本
 倉敷市 中島 彩平
 札束が浮いた美酒なら呑む汚職

和歌山市 若宮 武雄

出雲市 園山 栄

米子市 佐伯 越子

白湯の香り抱いて寡婦の喪服ぬぐ

米子市 柴田 英千子

やわらかい会話新茶が出たお膳

和歌山市 西山 幸

まぼろしを見たたくて海に佇ちつくす

名古屋市 越村 桔梢

蛸壺で安住できるかも知れず

和歌山市 江口 度

とある日の妻がネクタイ買ってくれ

枚方市 宮川 珠笑

無理をしたグリーン車誰も乗ってこず

和歌山市 福本 英子

愛の絵図塗りかえてきた二人です

高根県 榎原 秀子

空気みたいな夫婦で愛はためである

大阪市 川口 弘生

タンポポの種子風神にさからわす

倉吉市 今村 夕路

時にまた三猿だつて意見吐く

岸和田市 原 さよ子

花吹雪城一幅の絵となりぬ

大阪市 朝倉 利義

息してだけでも入って長寿国

尾鷲市 渡辺 伊津志

老人の対話芒の穂が揺れる

寝屋川市 宮尾 あいき

病院からの電話私より元氣

宝塚市 吉田 笑女

桜満開あしたは夫のドック入り

鳥取市 河村 日満

胸衿をひらきさんから君ンに落ち

岡山県 出原 敬一

満場の隅から覚えなき味方

神戸市 来住 タカ子

思い出に縫り信じることにする

大阪市 大野 武太

文弱な戦中派ですギター弾く

羽咋市 三宅 ろ亭

白雲を悠悠眺めた詩人恋う

島根県 小砂 白汀

睡れぬと言えばぬむり薬を給わる

大阪市 西森 花村

九字切ってみても代議士そこに居る

兵庫県 辻 文平

花を見に行く道にある踏絵

倉吉市 奥谷 弘朗

毎朝を出発点として生きる

米子市 小西 雄々

定刻に終り感謝の辞が長い

鳥取県 鈴木 村胤子

春の水鏡の鳥にも入れてやり

愛知県 池田 香珠夫

整形の鼻を易者が賞めちぎり

和歌山市 松原 寿子

花吹雪静義経のロマン

兵庫県 中田 白李

騙されぬ齡になったのも淋し

島根県 飯塚 虎秋

朝々のベッド山脈春が立ち

青森県 五十嵐 操史

婚養子だんだん肩巾ひろくなる

東大阪市 竹中 綾女

亡夫恋い道中これから何時までつづくやら

堺市 高橋 千万子

早春の彩でいやそう冬の疵

岡山県 直原 七面山

七十のファイトを孫に冷やかされ

広島県 砂田 静佳

折紙の中に童話を包み込む

島根県 大森 孝華

古傷を掘りおこされて春芽吹く

唐津市 桑原 掬治

信号がときには老婆を走らせる

唐津市 田口 虹汀

白魚の尻押しして来る春の潮

唐津市 越智 一水

百姓よたんぼぼにささ夢がある

今治市 江城 修史

ああ望郷幾山河を歩み来て

島根県 木村 はじめ

焼石に水でも笑顔の年金日

唐津市 新岡 回天子

蛙の声聞えぬよつな農薬化

唐津市 浜本 久仁於

水澄みて逆さに春を写すグム

大阪市 欄 蘭

叩き売りためらいもなく半値にし

岡山県 池田 半仙

中吊りの玉葱さえも芽吹く意地

唐津市 木塚 素石

寿楽の日奉仕おしやべりゲートホール

出雲市 石倉 英佐子

女ひとり素早く鬼の面を脱ぐ

唐津市 山下 勝一

三度目の見合い女の好奇心

島根県 大野 酔夢

遺産など知らぬ子どもものいい寝息

米子市 菅井 未知

肩たたき俺には次の職がある

唐津市 浜本 義美

買物に今日もチラシを一にらみ

和歌山市 坂口 公子

満つるもの欠けて又満つるもの美

大阪市 土屋 雅洋

再会の女はなれて腰をかけ

鳥取県 和井 観洋

ポケットのどこにも百円玉ない日

唐津市 岩崎 実

庭下駄の片方きつく沈丁花

旭川市 朝倉 大柏

一つずつ言葉消してくひとりの酒

豊中市 満仲 きく子

板画よしはり絵またよし花吹雪

和歌山市 津田 与史

合う苦の答えが合わぬ日が続き

八尾市 宮西 弥生

橋渡りきるまで止せうものおもしろ

倉敷市 藤井 春日

影法師だけは私を見捨てない

羽曳野市 麻野 幽玄

二三輪様子見るよう咲く桜

奈良市 森田 カズエ

女関ですむ集金で無事な日日

出雲市 高見 鐘堂

弱点を笑って聞ける齢になり

大阪市 白石 潔

地球儀の丸さいつまでと言う不安

出雲市 板垣 夢酔

靴謀反婦路とは逆な道えらぶ

平田市 角 耕草

乳母車柵に結んで逢摘み

岸和田市 清野 こう

ムツゴロ一追う影二つ有明海

和歌山市 時田 誠一

小心へ吊り橋余計揺れてくる

岡山県 井上 柳五郎

つかの間の倅せ火中の栗つかみ

出雲市 高橋 可保留

借りて乗る自転車どこかきこえない

八戸市 小泉 紫峰

四面楚歌紅一点のえくば見る

浜田市 佐々木 裕

我まませを内助の功へぶっつける

堺市 伏見 茂美

気苦勞の積り積りて一人病む

倉敷市 齋藤 通風

養子とてわが子実印預けおく

岡山県 岩道 博友

寄付金の少しの差で持つ優越感

東中市 小山 悠泉

舞台裏司会うどんをすすり込み

京都市 山本 規不風

危機一髪母が助けてくれた夢

山口県 高崎 喜一

静かさを好まるらしい神は森

和泉市 西岡 洛醉

凡人に今日も石橋叩く音

米子市 石垣 花子

捨てた尻尾喰わんがために振り

鳥取市 中森 葉士人

過疎の土から少年の過去を掘る

鳥根県 福岡 芳枝

寝たきりへ聞かせて音痴自信つけ

大阪市 藤森 小雅子

エコー利かして昼の貴方へ募る思慕

米子市 桑原 伊都

恒例のコンビで新春の舞台明け

今治市 新居田 胡頼子

明るさが夕餉も満ちる入学日

岡山県 稲岡 正之

手を組んで渡る吊り橋怖くない

具塚市 行天 千代

子育てを終えて淋しい母の詩

兵庫県 田増 貞子

何げない仕草に親のくせを見る

八戸市 島田 昭治

買うよりも高くついていた賈い物

兵庫県 野々口 ゆう也

五十六七十夢も彩褪せて

鳥取市 武田 帆雀

野良猫が安全圏で爪を研ぐ

米子市 野坂 なみ

会者定離発車のベルをきくも齢

米子市 雑賀 美世

買物の足をのばして里に寄り

東大阪市 三宅 哲夫

今の娘は喜び勇んで嫁に行く

和歌山市 堀端 三男

怒る気はさらさらこれが素顔です

羽島市 伊藤 静枝

雲を追ひ六十路をまどう啄木忌

岡山市 串田 句味地

いばら道辿りて傘寿もとうに過ぎ

鳥取県 羽津川 公乃

招かれて招いて祭りの義理を埋め

☆ 豊中市中桜塚三丁目13-15

橋高薰風宛(ハガキに三句以内)

愛染曼荼羅

(下)

橘 高 薫 風

枯魚が泣くむかしむかしの恋の河
月光菩薩の腰のくねりは愛だろ
行本みなみ(岡山市)

夢の中まで夫婦で汽車に乗る
猿からの電話はここで切れました
痛いところに撞木が当り鐘が鳴る

月原宵明(今治市)

花吹雪仁王ますます憤り

ハンガれて私が疲れ切っている

義衛入れてから尺八の甲が出ず

来住タカ子(神戸市)

哀しみの隅へころげる紙風船

からくりの裏の女の寒さかな

曲終る木馬は思惟の刻を得し

大路美幸(八尾市)

はなやかな男の棺も木でつくる

海は青空は青なり敗戦忌

影のない南瓜ゴロゴロ終電車

桑原道夫(和歌山市)

綱渡りではなし芝生を歩いてる

ポケットの塵と親しい劇場よ

音楽など鳴りは親しいが女来る

辻 文平(兵庫県)

ナイフが錆びている死なないことにする

俥に寝て白いシーツがこわいかな

渡辺 章(八尾市)

落椿免罪の如拾いおり

合掌の形で當持ち歩く

木の洞を酔いの如くに風が吹く

松原寿子(和歌山市)

日記帳を抱いたはこのあたり

天領へ逃げ込んで見る涙かな

虹指してああ修羅舞いのシャボン玉

河村日満(鳥取市)

死火山でないをいぢよい見せてやり

肩叩き甘い稼ぎの金をやり

詛りまたこなせず戦後からの郷

着流しのよき例にして句を語り

振袖が似合っていたに還曆か

最後のは挨拶句であるが誠に堂に入ったも

のである。これらの句を見て、路郎の直門だ

なあと感じる鑑賞者も多いことだろう。

羽原静歩(守口市)

愛染帖いろはにはへどちりぬるを

富士晴れて芒の穂まで寂然たり

反逆は正しい冬の火花かな

善人の足はじゅうたんなど踏まぬ

先生と社長に弱い日本人

なまくらな音を出していた尺八が、ある日

からすばらしい音色を会得した。芸事に

はそういう可能性がある。豆秋ばりの多作の

精進には深い敬意を抱く。

三宅不朽(竹原市)

雲いろいろわが身の上をきくことし

火花の母が子がいる原爆忌

虫籠のいのちたしかめ解くネクタイ

後から見れば不動も淋しかり

邪魔がられ有難がられ梅を漬け

健康の加減か 作品にむらがあるが、決ま

ばこれ以上はないと思える句を作れる人だ。

西山 幸(和歌山市)

彼岸花の道で爪先冷えてくる

明日があるあしたがあると毬をつく

やさしくやさしく母に纏打つ秋霖雨

勇者いま還りぬ白い落椿

また泣いて病棟へ散る枯葉たち

ご自身病弱、最近父上を亡くされ、長年病

臥の母上の看護に精魂を傾けておられる作者

だけに、句への思い入れは一入だが、「露草

のむらさきに居る小さい風」の繊細さも持つ。

宇佐美和子(高知市)

口紅を引く時ふいにその記憶

抱かれてからシヤガールの絵の蒼さ

おんな女サクラが散ってゆくように

飛梅やしんじつ恋は終わりけり

黒船屋いつか減る女の手

彗星のように現れて彗星のように消えた作

者には、夢二の黒船屋の絵の、白い女の手の

ように鮮烈な印象があった。

三井酔夢(香川県)

墨刑とおもつはくろとわが恋よ

愛恋歌コップに上る泡のごと
神に逢う坂かも知れぬ花吹雪
煌くやいのち繋がる娘の髪の大矢十郎(新宮市)

父哀し母の男として映り
婚姻届処女と書く欄見当らず

花嫁の父は一瞥されるだけ
女性の抒情と男性の批判が花と柳のように
ないまぜに交錯して、すばらしい曼荼羅を形
成している。殊に、みなみ、美幸、道夫、文
平諸氏の新味に注目したい。川柳の将来を指
向、暗示しているようだ。

和田恭子(神戸市)

吾子のごと沈み給えや膝枕
夜霧薄く絵ざら一枚砕くべし
堀江芳子(島根県)

牡丹咲く島の説りの温かさ
木登りを知らない子らに柿熟れる
香川酔々(八尾市)

革新も保守も平和の鳩翔はず
手品師の指も正午の箸をとる
小野克枝(倉敷市)

化粧して抱いて女は勇者かな
生きた犬抱いて平和は有難し
杉田絵巳子(池田市)

銀の匙うめばれてより錆はじめ
牡丹蒼白推理小説極まるるとき
川口弘生(大阪府)

火葬場に枝垂れ桜がよく似合う
かわたれに猿石の喜怒哀分かぬまま
出原敬一(岡山県)

雪はじく竹に一揆の貌がある
同じ社の銭に飼われている親子
櫻谷寿馬(伊丹市)

善人は花を愛する真似をする

勲章をくれる悪いことしないのに
鈴木村親子(鳥取県)

団体の中に夫婦でないふたり
萬歳の腰から下は障だらけ
岩田三和(島根県)

コンニャクにきびしく箸を刺してのむ
山寺で考えぬいて辻に立つ
宮西弥生(八尾市)

中年の恋も花火に寄つて来る
秋の罪日記に書くは詫びるなり
川端柳子(岡山市)

旅つづく冬咲く花もある安堵
何匹も木馬が走るうろ覚え
浦野和子(和歌山市)

金米糖白だけ残る無為の日上
恋終るケーキに飽きた無邪気さで
森脇善彦(橋本市)

ギラギラの苦海浄土に竜の骨
子に職が決まり天下の論もてる
高橋古啓(豊中市)

その傷を待ってたようにふき出す血
迷いから醒めると鱗光らない
若柳雨花(高槻市)

春の雨難波に近い御堂筋
宮尾あいき(寝屋川市)

老いて尚桜かなしや花盛り
安達潮音(島根県)

看護婦の口紅生きることのよし
馬場魚山(小松市)

焼け死んだニュースの後へ寄席囃子
池田香珠夫(愛知県)

岩下美樹(神戸市)

洗髪はばらく耳を留守にする
白岩文衛(岡山県)

若者の唄を近ごろ父が好く
伏見茂美(堺市)

追いついて父娘に話無かりけり
奥谷弘朗(倉吉市)

毎日を明日がござるで生きてやろ
斎藤三十四(東大阪市)

種を播くミレーに大きな空がある
黒川紫香(尼崎市)

カラス一羽浪の高さを計つてる
戸田古方(川西市)

紫がこんなに甘い色に見え
宮川珠笑(枚方市)

栄転を見送つたあとと残業す
田垣方大(倉敷市)

古傷にやんわり触れる妻の酌
中村 優(富田林市)

自画像に魂入れる顔の皺
江口 度(寝屋川市)

渦潮を見てる明智探偵も
小幡里風(倉敷市)

十字架を背負う足音だと思つ
武田帆雀(鳥取市)

町工場みかん箱にも鉄を詰め
西森花村(大阪府)

披露宴黙して食べる独身者
中森葉士人(鳥取市)

あくびしてライオン猫の目に戻る
朝倉大柏(旭川市)

くたらない話に傷が癒えていく
中田白李(兵庫県)

愛乗せて自転車二つの輪がまわる
★

「愛染帖」投句先

〒560豊中市中桜塚三丁目13-15

桶高薫風宛(ハカキに三句以内)

秀句鑑賞

前月号から

田垣方大

新聞の切りぬきを貯め多忙なり

高杉 鬼遊

「新聞の切りぬきを貯め」までは平凡であるが、「多忙なり」の下五で人物と生活がばつと出てくる、しかも面白さを含めて。

み手洗に噓き切れない顔もくる

中川 滋雀

抜け道を行くから碧い空がない

黒川 紫香

この二句は全く違った表現であるが、「噓き切れない」と「抜け道」で生活に押された人物を出して世相を諷刺している、二句とも深みの句。

石沈む石のなげきを知る波紋

嘉数千代香

石と波紋の句は多いが、この句のように心打たれる句は少ない。石を投げた人もこれからは、怒りや寂しさを石にぶつつけないで、じつと堪え忍んでほしい。

ポケットベル今止り木にゐるんだよ

野田素身郎

なんとユーモラスな句なのだろうか、下手な評をやめてじっくり味わいたい。通勤する人の緊張感も含めて。

おかめの面に深いかなしみ隠してる

高橋 夕花

福々しいにこやかさの裏に女性としての悲しみがあるのか。悲しみは優しさになる。金の要る話を金持避けたがり

「貯れば貯る程なんとか」大きな皮肉をさりりと表現している。

傍島 静馬

手袋をとって拍手をした温み

山内 静水

誠実な支援はこうありたい。ほのぼのと心温まる句、作者のお人柄のように。

通り魔の気持がわかるおぼろ月

河村 日満

聖人君子も内心では動揺する雰囲気をよく出している。下五の重要さを教えている句。

男性の扇子の風は汗臭し

不二田一三夫

暑さを克服して活々と働いている男性を表現してあます処がない「汗臭し」がすべてを物語っている。

ちぐはぐな色も春なら許される

谷垣 史好

百花繚乱の春である。灰色の冬なら違和感の柄もこの時期なら受入れてくれる。「許される」が意味深い。

躓いてよかった奈落が見えて居た

浦野 和子

ぶつ倒れたら奈落まで一直線か。底を見た人は強い。人生を教えている句。

顔も見ず見せず女の靴磨き

野呂 右近

柳人の炯眼よく女性心理をとらえている。職業に貴賤の別はないと言われているのに。みの虫を動かす春の音がする

冬、内からは微動もしなかった、みの虫が

風もないのに内部が動いている。みの虫に焦点をあてその息遣いで待望の春をよくウタイ

あげている。入れ歯はめても歯きしりが直らない

江口 度

人間の習性はそう簡単に直らない、可笑味と皮肉な句。

装えばよそおう程に老いが見え

柳原 静香

どんなにおめかししても内面的なものは隠されない。あるがままの姿が一番美しい。

母にして女を捨てぬぬか袋

辻 文平

女性はいくつになっても美しく見せたい。ぬか袋を使う女性は少なくなったが。

釣竿で浮世の憂さを払いのけ

本田恵一朗

竿を左右に振って獲物をあげる時の醍醐味は格別。物価高も、人間関係のうつつしさも念頭にない。



本堂の前・左から阿部・不二田・奇童・山田・紫光諸氏

弓削川柳社から生中継

— テレビ朝日「ワイドサタデー」

ゲスト出演

不二田 一三夫

岡山久米南町は？ 4月26日(土) 共同制作として8局の名が出ています。

扉① 構成・丹波元/司会・阿部牧郎・山田元子/レポーター・梅津竜三郎/アシスタント・大海れい子

扉② 大俣農業組合長以下大勢と、ゲストの漫才師・中田伸二・伸江(松竹芸能)

扉③ KSB—岡山県久米郡久米南町

弓削川柳社会長 浜野 奇童さん
泰西寺住職 長谷川 紫光さん
作 家 不二田一三夫さん

扉④ 制作・三上泰生/P・津田敦/D・橋本潤一郎・岡田幸彦・岡野均/美術進行・邑上謹也/タイトル・竹内史朗/ほか四名
中継スタッフ十七名

ざっと見て四十名ほどの裏方さんがこの仕事にかかっているわけだ。

台本P1・国鉄津山線弓削駅・山田元子
山田—今日は、山田元子です。前略—ここ

は岡山県を走る国鉄津山線の弓削という駅です。中略—構内に張ってある川柳に気づき、山田—この町は、すべてが川柳すくしの町だそうですよ。—ここで駅の人たちに語りかける。

台本P6・久米南町弓削泰西寺の門の近く—阿部牧郎。不二田一三夫と一緒に歩いて来る。

阿部—今日のテーマが川柳なので、大阪から漫才作家で川柳にも詳しい不二田一三夫さんを特別ゲストとしてお連れしました。(とぼくを紹介)

この泰西寺というお寺で、今日は川柳相撲や川柳寸劇といった、あまり聞きなれない珍しいものをこらんだきます。

(この日は徳島県から漫才などと交互に放映されています。)

台本P26・ここで長谷川紫光さんと、弓削川柳社会長の浜野奇童(本社参事・日川協監事)さんが紹介される。「どうしてこのよう

数年前、テレビ朝日へ「標語作家・不二田一三夫」で出してもらったが、今回は「漫才作家」としてのゲスト出演である。

弓削川柳社から句会風景の生中継だが、前日の4月25日に台本を手にするまでは何をやるのか全然わかっていなかった。

弓削といえは、弓削駅構内に路郎先生の「俺に似よ、俺に似るなと子を思い

の句碑で有名な所だが、この原稿を書いているとき、句碑の建った昭和25年当時の弓削駅長だった大森煥句楽氏が4月23日に死去されたことを知った。あの句碑は煥句楽氏の尽力があつてこそ建ったさうである。

話が横道にそれたが、テレビ放送の台本をまだ見たことのない人のために簡単に書いてみよう。

まず表紙に「多元生中継テレビショウ・ワイドサタデー」。こちらは農協TV局・さ

に町ぐるみで川柳を作るようになったのか」とたずねられ、敗戦の苦しみのさ中、何か明るい希望を求めようと、紙とエンピツさえあれば作れる川柳へと人気が動いていった。昭和23年でした。と両氏が説明する。



過去追えば過去美しく化粧する

奇童

右・浜野奇童氏 左・不二田一三夫

不二田「大阪の新聞にも週刊誌などにも大きく出ていましたし、ほくは古くから機関誌の編集を手伝っていましたからよく知っていました」

台本P29・川柳饅頭の店先きで山田元子さんと、この店の主人夫妻山田止水・福世さんと会って、饅頭の製造法などを見学する。

台本P33・阿部「浜野さん、町内の辻々にある川柳をみてますと、川柳というより標語に近いものが多いですね（さすが作家の司会者である）」

奇童「町役場のようなお役所が募集すると標語のような川柳になり勝ちですね」

阿部「不二田さん、川柳には川柳の約束があるのではありませんか？」

不二田「俳句は季語、川柳は人間ということになっていますが、川柳が標語に近づいたのではなく、標語が川柳に近づいたのです。というのは戦前の標語は「一死報告」や「まず健康」といった、いたってお色気のない命令調の句ばかりでした。しかし戦後はそんな命令調では誰もついてきませんので、575のやわらかい川柳調へ近づいたのです。

今年の防火標語の代表句は

「あなたです！火事を出すのも防ぐのも」と川柳調なんですよ。」

台本P35・川柳寸劇が始まる。鐘の音が入る。作者は長谷川紫光さん、演者は光元常章さん（22歳）と岸本背さん（20歳）で、この九月に結婚するカップルである。テレビではこの寸劇がお気に召したか、予定の三分間が可

成りオーバーした。紫光さんの祝詞（のりと）も名調子なら祝吟二句も佳句（紋土誌で止水さんの句と共に発表されるだろう）お二人も大熱演だった。「熱（ねつ）と読まずに（あつ）と読んでほしい。」

台本P58・阿部「山田・不二田、川柳饅頭を食べている。（泰西寺の本堂の前の階段に腰を下ろして）饅頭に焼きつけた句を読む時間がなくなっていた。」

阿部「不二田さん、食べて一句浮かびませんか」

不二田「実は糖尿で、ここへ来る前の日、医師から甘い物いっさい食べぬようにと注意されましたが、ひと口食べて、あまりのうまさ、ええい、後はどうなってもええわいとみな食べてしまいました。そこで実感の句」

「糖尿も川柳饅頭見逃せず」

句はまずいですが、饅頭はうまいですよ（あとで止水さんからお礼を云われた）

台本P60・いよいよ目玉商品の川柳相撲である。ほくは横綱格の自ら対戦することになっていたが、時間の都合で一と組より映らないことになり、ほくは遠慮して地元の方に出てもらうことにした。

一分間で作句するというので緊張する。大きなタイムウォッチを前にして30秒前より5秒前と締切り時間を告げる。行司の奇童さんが短冊を軍配で受けて東西のどちらかへ判定を下すのだが、それを相撲のきまり手で決めるのも愉快である。

呼び出しは美声、治部俊明さん。行司はも

う全国的に有名な浜野奇童さんだ。本場所の
ような烏帽子も堂々たるものである。

●「賭博」

ルレットくるくる人生狂い出す 北星
○もう一度賭ける氣祖先の山を売り まき子
「狂い出す」は説明的。西方の「祖先の山
を売り」は具体的に表現しているのが勝負の
わかれ目になったようだ。

題「酒ぐせ」は時間がないので阿部氏と元
子さんが各力士の中へ割り込んで行って句を
読みあげる。

—酒ぐせをセーブしている目出度い日 祝郎
—酔う程に自慢の喉で名調子 百合子
—泣き上戸結婚式でぐせを出し 康夫
—釣書きがない酒ぐせが波を立て 登志子

第26回 観桜川柳大会

—川柳むらくも主催—

散り桜を男 さくららに負けている 水客
流れみな集めて川は碧となる
賞め方は下手だが情にもろい人
癒える日を信じ我慢の灸をすえ
ふる里で小鮒すくった川も消え
よろよろと我慢のしびれ立上る
ひとり占めしたい笑顔を持つ女
恋人を素足にさせた春の川
さくららには酒いつもながらの日本人
世話好きのする善意には敵が無い
万才のようなやとり老ふたり
本流も名前が変り注ぐ海

郎枝 独仙 花子 孤呂二 月子 天笑 夕路 弘朗 雄々 萬的 紫香 水客

—酒ぐせを子の作文に叱られる 醉山
—本場の親子酒ぐせまで似て来 哲郎
阿部「不二田さん、どの方が気に入りましたか」

不二田「いやーみなさんうまいですよ（今日
は川柳人として出席していない）行司さん
は大変ですね。紙一枚の差が勝負どころです
から。よっぽど馴れないと行司の役はつとま
りませんな」

阿部「どうでしょ、われわれも「コマーシ
ヤル」という題で作りましたよ」
—コマーシヤルがなかったらNHK
—コマーシヤルテレビの中のおじやま虫 阿部 牧郎
山田 元子

我慢する煙草周りは派手に吸い 可保留
春の川筏舟ひとつロマン乗せ 竹雪
献血車今日も善意で満たされる 登美也
そのこぶし振るなと耳朶に亡母の声 きみえ
我慢には馴れた世代の歩巾持ち 多賀子
巡礼の鈴は善意の音で鳴る 夢酔
ならの悲劇都会にある非情 軒夢
人情の行き過ぎあらぬ噂たち 軒夢
息の根は石油一つで止められる 峰雪
古傷にふれぬ情が身にしみる ゆき子
情にばかりおぼれていては儲らぬ 蚊声
師を丸く囲みなつかし善意の輪 マサコ
窓口の笑顔に不安救われる 建一
我慢してやっとなる春迎え 幸子
満水の川面にゆらゆら丸い月 雪路

雪路 幸子 建一 マサコ 蚊声 ゆき子 峰雪 軒夢 夢酔 多賀子 登美也 竹雪 可保留

—コマーシヤル明るい暮らしの知恵袋 不二田一三夫
（後日、中二の孫娘が句評した。「おじや
ま虫」が、いちばんよかった。つぎが「N
HK」センセ（ぼくのこと）のいがいばん
アカン。ちよっともオモシロない」
台本P67・阿部「楽しかった弓削からの中
継をこれでおわります」

★ 泰西寺の本堂の階段を這って昇ったときほ
くの大きなお尻が映ったようだが、これをケ
ツ作となう。「帰りに奇童さんの案内で川柳
の小径・公園の句碑を見せてもらったが、川
柳の町の恩人である路郎先生の句碑と一緒に
全国へ紹介してほしかった。

焼香の順が違っている我慢 早苗
歴史もつ川の流れも水ぬるむ 百代
孫あやす春の小川のわらべ唄 富子
花日和値上げラッシュをふと忘れ はじめ
夜桜を映して川面ゆらいでる 秀子
さくらさくら今に伝わる琴の唄 孝華
夜だけ我がものにして川の音 文子
詩情ふそ風にゆれる夕桜 孝華
情熱をそそぐ先祖の職に生き 紫吻
人情の国に哀話の第二幕 福子
情もろき人の如くに夕牡丹 みる
人情を忘れた蟬の抜け殻で 芳子
一年の早桜を賞でながら 正朗
軍歌まだ桜の下で勇ましい 明朗
ライバルの笑顔に負けを知らされる

明朗 正朗 芳子 みる 福子 紫吻 孝華 文子 秀子 はじめ 富子 百代 早苗

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

野村 太茂津

アル中のとむらいやはり酒になる

矢野 佳雲

断酒した男の家は酒造り

越村 枯梢

父の酒減った安堵と淋しさ

西出 英子

熱燗をチビチビゆるそうかと思

森田 熊生

「酒」をテーマにした秀吟四句。前掲の二句は最近少なくなったユーモアがあり、そして哀歎が漂う。四句共一読して心に沁みる真実味の句と言えよう。

よう切れる男言葉に錆がない

和井 親洋

完全無欠なものよりも、何処か欠点?のあるいびつなものには私は惹かれる。だから所謂「切れ者」は好かぬ。「錆がない」とは作者はそこを突きたいのかも知れぬ。

死ぬ一步手前の話を笑わせる

川上 溪水

笑い話にされるのは幸せなお人だナアと思ふ。筆者などは死界へ片足を踏みこんだ話をするに皆深刻な顔で聞かれる。なかには泣いてくれる人もある。「笑われて」良かった。今日ばかり急いで明日を見失い

岸本豊平次

消えてゆくだからきれいなシャボン玉

園山 栄

シャボン玉と知りつつ尚も縋りつき

時田 誠一

焦ることはない、明日は明日の風が吹く、東の間を美しい夢をふくらませて風に浮くシャボン玉。直ぐ消えるのだ、とは知りながらも生きる夢に縋りつこうとする人間の弱味。往復切符だから安心して待てる

坪島美津江

作者はなんと心優しい人だろう。往復切符でも安心されぬ筆者などは、いつも嵐の糸を引っ張ったり、弛められたりしている。信じ切っている作者は安心出来るのであろう。違いにゆく余熱の温みだけ信じ

富上 光代

余熱とは以前に逢うて訣れたときのもの、そして今再び逢いに行く。あのとときの余熱だけを信じて逢いに行くに言いきかせて、読者はいろいろドラマを組み立て連想する楽しさがある。

組板に昨夜のしこり刻む音

新居田胡頼子

今朝の包丁の韻きを昨夜の諷いのしこりが

残っている音と受けとめている。互に解決し妥協したつもりだったのだが、日頃の平凡な響きでない何かがある。

小鉄の切つ先哀しいまでに切れ

桑田 静子

切つ先は鋭いと驚くほどでもない、いつも使っている小鉄だろう、しかしこの時の作者の心には、何か哀しい邪念があつて、それを断ち切る切れ味に妖気を感じた。こんなに切れなくてもいいのに、尚哀しくなってきた。ストローを曲げ折り好きとまだ言えず

中森葉士人

この作者にしては平凡だが、私はこの句とは正反対の性格だから、歯痒い感じだ。ストリートに言えないものか、相手も感じているんだが、先に言わせようとする。

女とて破目ははずしたときもあり

中辻 千子

女心に疎い筆者には驚きである。それとは知らずに破目をはすし平気で居れた男のエゴイズムを反省させられる。どうぞ自由に翔んで下さい、卑下なさらないように。

逆ろうて見る親もなし喪に服す

石井 雅水

親御さんを亡くして自分の間は、心にポツカリ穴があく、そして日時が立つにつれて、この句の感慨が湧いてくる。懺悔して御供養に務めてほしいものである。

汗しみた拳骨だからよくこたえ

朝倉 大柏

これは又、生きた愛の鞭を感謝している。

むし歯

集 齋藤通風選

妥協した仮面むし歯疼きだす
口頭試験むし歯の痛み忘れてた
むし歯痛好きな酒なら喉を越す
辛党にむし歯がないわけなし
むし歯の子ババは歯科医でまた校医
ままごとの挨拶させているむし歯
糸一本祖母の手練で虫歯抜け
容赦なく抜かれた虫歯見せられる
むし歯けずる音は地獄の音ならん
このむし歯親ゆずりかとうらみもし
少年の壮志へむし歯邪魔をする
チヨコレート虫歯の虫が良く喰べる
他に病氣ないがむし歯に悩まされ
甘いもの好きで虫歯のない誇り
総入歯むし歯の痛みなつかしき
金平糖ひよいとむし歯にころげこみ
頑固者やつと弱音を吐く虫歯
極貧に育つて虫歯見当らず
虫歯痛ウイスキー飲んでから止まり
仁丹が此処だとむし歯の中にいる
おとなしい顔を虫歯が夜叉に変え

ゆう也 暁明 七面山 不二 勝一 宵月 四郎 綾女 静枝 可住 秀峰 栄 一路 登美也 優 佳雲 義美 可保留 胡頹子

年金の暮らしにむし歯ほっとかれ
妊つてむし歯もぼつぼつ出来はじめ
今夜中むし歯よちつと遠慮せい
山海の珍珠もむし歯喜ばず
無い虫歯神の恵みと噛みしめる
エリートも顔をゆがめているむし歯
朝を待つむし歯が痛む夜の長さ
過保護また次の虫歯をこしらえる
菓子屋から表彰されそうな総虫歯
ボス猿も虫歯にやられているよしい
ブラぶらの虫歯へ舌がかまかける
歯の治療優しい声の残酷さ
泥縄の歯みがき虫歯が出来てから
石女もむし歯の痛さ知っている
征露丸いたい虫歯に一夜漬け
虫歯大きく見せてチビツ子の自慢
過保護から虫歯のような子に育ち
胎動へむし歯の痛み続く日日
毒舌をびったり止めているむし歯
一本の虫歯でミスは準どまり
むし歯から古墳のひとが語り出し

洛酔 博友 古方 春日 勝美 方大 彩平 素身郎 哲夫 里風 夢酔 掬治 多賀子 文平 御前 保夫 虹汀 弘明 四郎 大柏

衣食住足つてむし歯にさいなまれ
燃えつきた花火に虫歯うずきだす
むし歯の子母が宿題して寝かせ
虫歯とておふくろの味知っている
歯が疼く兄へ家中の歯が疼く

カズエ 登竜 木魚 芳枝 千代香

むし歯かてよく働らいた過去がある
さわるほど悪い虫歯に似た喧嘩
虫歯だらけの口できれいな嘘を吐き
歯の疼き洋酒含めば胃が歓迎

凡九郎 虹汀 洋々

オリンピック

柳楽鶴丸選

大国のクシャミオリンピック揺れ
オリンピックさて大平が煮え切らず
アフガンの狼火に揺らぐ聖火台
大国のエゴで五輪旗色が褪せ
オリンピック政治の渦に巻きこまれ
アメリカの自由にはさせぬオリンピック
オリンピックを政治に利用する馬鹿もいる
いがみ合う国旗五輪で手をつなぐ
黒い輪がだんだん太くなる五輪
オリンピック水爆どこかへ落ちそう
八十年代雪解けほしいオリンピック
参加不参加オリンピックって何やろか
伏兵がオリンピックに賭けた足

花子 登美也 大柏 洋々 栄 七面山 優 武水 里風 洛酔 凡九郎 一路

吟 題 課

オリンピックのメタルみやげにプロ入門
 身障のオリンピックへ気をはぐし
 オリンピックおらが村から出た選手
 チャンネルも家族が一致のオリンピック
 オリンピック日本であつた頃徳ぶ
 むずかつて五輪音頭は乗つてござ
 五輪拒否自由の女神哀しそ
 参加する意義へ五輪の鐘が鳴り
 みせかけの平和へ揺らるオリンピック
 スポーツか政治かオリンピック宙を舞い
 オリンピックまず商魂がぶつかり
 オリンピック勝つて泣くのもお国柄
 オリンピック千円硬貨今十倍
 オーエンス昔の夢は今は亡し
 未来図へオリンピックを入れておく
 デザイナーオリンピックの衣装見る
 お茶の間にオリンピックの指定席
 五輪旗に犠牲にされている婚期

秀子 秀子 道子 美恵 綾女 裕
 胡頹子 秀峰 素身郎 軒太楼 方大 勝一 午朗 炬齊 佳雲 満津子 方大

テリミ 弘 左春 久仁於 句味地 古方 秀峰

世界 中平和 求めて 聖火 燃え

平和と平等のオリンピックが泣きそう
 人 地

原点到帰れとささやくベルタン
 国境を越えて花咲くオリンピック
 国境はやつぱりあつたオリンピック
 平和の鳩オリンピックへ糞なげる

テリミ 弘 左春 久仁於 句味地 古方 秀峰

天 世界は一つ地球はオリンピックへ無言
 凡九郎
 軸

入 梅 田垣方大 選
 ゴールドメダリストへ旋盤素直なり

買溜めも入梅までの煙草です
 入梅へ降らない日でも雨衣持ち
 入梅も近しばつ痛む膝 一路
 入梅の前線豪雨をつれてくる
 入梅の雲ゆき燕低く飛ぶ 比呂志
 入梅時食中毒が気にかかる 綾女
 入梅に今は昔の糞と笠 実
 入梅で農道俄かに活気づく 義美
 入梅のころにすつかる酒のしみ 芳枝
 朝炊きも夕餉にすえて梅雨に入る 代仕男
 すきを引く牛も見えない梅雨景色 裕
 札幌は桜沖繩はもう入梅 ろ亭
 大志持つ男入梅など知らず 文平
 湯治場も決まり入梅近づく日 古方
 愚痴っぽい母になつて梅雨の入り 大柏
 入梅も近し屋根の修理を急ぎたてる 春日

何もかもさびついて居て梅雨を知る
 梅雨の入り煙草の味が知っていた
 入梅へ足の水虫動きだし 勝一
 入梅にふとんかんそう機で儲け 喜一
 入梅へ尖つた言葉まで湿めり 洋々
 入梅で部屋も干場の子沢山 優
 入梅の飯場は今日も酒になり 青丹子
 入梅へ土木課土手を確かめる 悠泉
 百姓は入梅という節を持ち 弘朗
 入梅を蛙が知らず村に住み 同
 カビ止めの葉が匂う梅雨の入り 胡頹子
 わだかまりとけぬまんまに梅雨に入る 佳雲
 リユウマチにきつちり入梅当られる 木魚
 長靴をさかさに乾して梅雨に入る 里風

借金もすまないままに梅雨に入り 七面山
 梅雨の空眺めて化粧が進まない 博友
 入梅を蟻の動きに教えられ 軒太楼
 入梅へてる坊主かびがはえ みどり
 入梅へ地下足袋洗濯したまんま 青丹子

梅雨しとどあじさい多情な彩で濡れ 千代香
 人 地

入梅へどの傘も骨折れている 素身郎
 天 入梅へ順路を急ぐ 遍路笠 宵明
 軸 雷で降り雷で晴れる梅雨

「交替」 入選発表

選者 川村好郎
投句総数 三百五十四句
入選 五十四句

東大阪 美子
交替のチャンス闊志湧き立たせ
引継ぎを終えた疲労と安堵感
和歌山 英子

會敷 春月
交替へ時計の針のおそいこと
交替の世代へ未練と羨望と
米子 未知

會敷 三林坊
交替のない妻の座を守り抜き
交替のナースはずんだ声になり
和歌山 正博

和歌山 頼次
交替のきかぬさだめを進むのみ
交替を促す拍手とは知らず
米子 静絵

和歌山 紀久子
交替を促され花びら楚々と散る
三交替機械は休むひまがない
米子 伊都

大阪 君子
嫁に替つてからの家計が揺れはじめ
交替の空気がうまい夜勤明け
大阪 寿幸

大阪 好一
交替の出来ぬ若さの死を惜しむ
交替をするには頼りない野党
大阪 道子

八尾 夕花
主婦交替嫁より派手な彩を着る
交替の嫁に教えるかくし味
旭川 大柏

米子 みど里
組を嫁に渡して急に老け
栄転のあとへ左遷の荷が届き
米子 美世

熊本 芳仙
役得を事務引継ぎに匂わせる
初孫を抱く順番の手にせかれ
會敷 素身郎

大田 軒太楼

交替の理由赴任をしてわかり

西宮 白宗
負うた荷に交替はなし父の汗
東大阪 没食子

引継ぎをすませ異越が手を握り
寝屋川 度

畠を打つ交替のない過疎の村
米子 なみ

子に家を譲って祈りの残り坂
大阪 小雅子

天下りたらい廻しの椅子につき
出雲 可保留

交替でする看病に夜が白む
鳥取 洋々

新顔の大臣覚える頃替り
大阪 柳宏子

社長の座譲り実権もつ会長
返り咲きという交替だつてある
真面 一本杉

交替の炊事に馴れて共稼ぎ
交替へ続く夜勤をねぎらわれ
富田林 花梢

ある時の女心を替える雪
はき捨てのような交替社の人事
枚方 星斗

交替の時間も確か腹時計
交替の人事移動に明と暗
和歌山 寿子

交替の椅子へ花道賃し過ぎ
定年も交替もない台所
岸和田 千舟

交替を断り看病の妻徹夜

代りばえせぬリーフ打ち込まれ
東子 悠泉

替れるなら替つてやりたい子の手術
一軍へチャンス代打のホームラン
和歌山 としよ

遅寝早起交替なくとも母愉し
交替の炊事も楽しマイホーム
米子 雄々

不景気をバトロン替えて乗り切る気
交替で来てはホステス飲んで食へ
交替の看護へ安堵の茶をすすり
佳句

新緑も交替とはかり萌えて出る
和歌山 和子

権力の交替飛鳥に見るドラマ
交替制妻が宣言して早寝
會敷 里風

貸付が顔きく頃に入れ替り
組板にリズムが替る共稼ぎ
富田林 優

人ノ句
和歌山 幸代

交替の嫁のタクトが冴えすぎる
地ノ句
兵庫 白李

交替は居らな要らない母の役
天ノ句
羽曳野 吐来

交替はない人生をただ生きる

銀行へ次は専務が泣きにゆく

昭和五十五年度

一 寿子 七、五 和歌山
二 弘生 七、五 大阪

三 雄々	七、〇	米子	一〇	一二三	六、〇
四 吐来	七、〇	羽曳野	一一	優	五、〇
五 白宗	六、五	西宮	一二	小雅子	五、〇
六 花梢	六、五	富田林	一三	好一	五、〇
七 道子	六、五	和歌山	一四	右近	五、〇
八 和子	六、〇	大阪	一五	方大	五、〇
九 武雄	六、〇	和歌山			〇

昭和五十五年度第七回
「やりくり」三句以内
締切 六月二十五日
第八回「習慣」三句以内
締切 七月二十五日
以下略 藤井一二三方 大萬川柳係

川柳塔社常任理事会（5月1日）

大型連休にはさまれた五月一日、それでも11氏が参集した。栗氏の句碑建立地が三転して八尾市太子堂の勝軍寺と決定した。多久志氏案の資金確保のテーマを二三天が代わって報告。

郵送料直上げに備えて安い写植を五月号にころみたところ、ごらんのような不出来で編集に支障をあたえたことも一三天から報告六月号からは安いことよりも良いものへと切り替えることになった。生々庵主幹から毎月YFCの講演料をいただいているが、初心者会員を一人でも多くお世話ください。毎月第三火曜日の午後一時

雅号ぶつちやげばなし（188）

し しょうち



新谷 笑痴

し ん た に

昭和三十四年頃大阪府建築金物卸組合に、文化部にオプサ川柳会があり、廿七会会員の中村喜和夢氏に川柳の指導を受けて居りましたが、ペンネームをと思い笑痴と自分で付けたのが始まりです。川柳は人間性の探求にあり、人情の機微をも知るものと教えられたので、その事を理解、納得、即ち笑痴（承知）致しましたと言うのが理由で、その後幾度か改名をと考えましたが、愛着と適当なのが見当らず今日に至った次第です。川柳に対しては一言、川柳は一握りの愛好家のものであってはならないと同時に新しい傾向の川柳と称するものに抵抗を持つものです。（会社員・六十一歳）

NHK川柳募集

課題 「ゆとり」 選者 川村好郎

ハガキに三句以内を書き六月十日までに左記へ投句して下さい。

投句先 〒540 大阪市東区馬場町 NHK近畿本部

発表 六月二十八日（土）午前九時十五分

ラジオ第一放送（全国放送）

「老後をたのしく」の時間

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹は相変らず公私共にご多忙である。年齢よりもお若く見えるがあまり無理をなさらないよう、と側近の人たちの願ひである。

▼54年度ふあうすと賞最優秀一ひとつ詩ひとつ風とめぐり逢う・前川千津子
優秀一雨の日も夜のあけるのは美しい・光森 良 優秀一目つぶれば土踏ますより知る秋で・長谷川好子
紋太賞最優秀一白足袋の罪ひっそりと干してある。和島恵美 優秀一さよならが鳥らひら 優秀一冬の池・青木紀雍子。

▼第4回時の川柳社作家賞一日当りを探す気弱な鬼に――中野正玉 準作家賞一風邪三日ぬくい言葉を子に貰う・和田光代 同一科白のない通行人として消える・北藤七星
▼宮城野54年度最優秀作品一原尊忌北は祭に酔い痴れ

・田井信夫 次点してのひらの地図で幸福駅さがす・村上多なみ 同一真心を抱いて飛べない千羽鶴・三浦重雄

▼第12回54年度周魚賞受賞作品銀盃呈し一人柄のことは東大保証せず・神田仙之助 同賞一愚痴云わぬ父が大きい見えてくる・金子友紀
一四〇頁一論文5周年記念号は一四〇頁一論五・東野大八(伝統川柳が難解性となる日)尾藤三柳(観音びらき)ほか。一特集・現代川柳二〇〇人集(全国著名作家作品)定金冬二作品五十句。インタビュイー・アラカルト(全国指導者三〇名の一言集)ほか盛り沢山。詳細は八一―二・川柳公論社。

▼川柳しのの三月号は岡田甫氏追悼号。25氏執筆の圧巻である。本誌論議の諸氏も執筆され七一読されるようお推めする。定価400円(299円)〒390松本市大手二一五十三・しのの川柳社。

▼大井正夫氏(姫路市・元日川協事務局長) 4月22日午前1時すぎ死去(78歳)葬儀は翌23日自宅でおこなわれた。(謹悼)

▼中村富一氏(横浜市)は五月三日午前二時四十九分胃癌のため死去。五日葬儀革新派「aの会」の代表として活躍、後進の指標の一人だった。四月八日には碧梧柳奨励賞(作品)表彰式と記念パーティを銀座で開られたが氏は病臥中で欠席、川柳関係では始めての受賞だった。(謹悼)

▼西尾菜氏(八尾市)句碑建立地は三転して勝軍寺太子堂に決まる。(詳細次号)
▼尼緑之助氏(出雲市)軽一脳溢血で四月九日に出雲市今市町の県立中央病院へ入院。しかし退院は間近らしく二吉報を待ちます。
▼橘高薫風氏(豊中市)5月11日の東洋樹賞受賞記念川柳大会は盛会、氏の講演も好評(詳細次号)なお六月から朝日新聞に(大阪版)柳壇が設けられ、薫風氏が選者、一三夫がエッセイを書くとことになった。(文責・不二田一三夫)

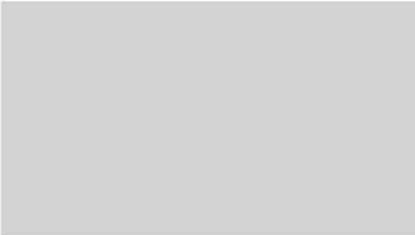
▼浜野奇童氏(岡山県・本社参事・日川協監事)から4月26日のテレビ朝日の「ワイドサタデー」から弓削川柳社の生中継は好評でした。本社の一三夫氏が

ゲスト出演されました。▼市場没食子氏(大阪市)から一若林草右先生が胆石で日赤病院で再手術されました。ご容体を気づかっています。(死去詳細次号)
▼藤井明朗氏(島根県)から第26回観桜川柳大会は大阪から水客・茶香・萬的諸氏ほかのご出席を得て65名の盛会でした。
▼久家代仕男氏(平田市)から尼先生の入院中は同人団結するよう独仙氏の招集に決意を固めました。
▼香川酔々氏(八尾市)5月5日の川柳展望五周年記念大会で秀句賞のメダルを獲得された。本社から栗・小松園・形水・薫風諸氏ほか十数氏出席お祝いはた。

▼柴田英王子さん(寝屋川市)から一桜の宮の通り抜けていただいた句集に一通り抜け嫁と娘とわたくしと一満津子。一年の早きニュースの通り抜け一道子。の二句の短冊が桜の枝につけられていたようです。

▼大森娘句楽氏(岡山県)4月23日死去。氏は弓削駅長時代に路郎先生の「俺に似よ」の句碑建立に尽力された人。(久米雄氏の執筆で詳細は次号)

▼吉野富江さん(和歌山市)はかねて入院中のごとろ五月初旬死去。(詳細は次号に三幸氏が追悼文執筆)
▼不二田一三夫氏は4月26日のテレビ朝日の「ワイドサタデー」に漫才作家としてゲスト出演された。(本誌参照)



▽旅 信△

▼黒川紫香氏から一水客・萬的・私の三人が、むらくも川柳会。観桜川柳大会に來ています。一問歩深し銀の値上り知らずとも一紫香
▼高橋操子さんから一岸せん的女性軍ばかりで白浜に

新 同 人 紹 介

宮 井 勇 次

石 川 晶 子

加 藤 隆 恵

杉 田 周 穂

南 宣 子

安 村 五 穂

神 山 隆 史

坂 家 和 美

藤 崎 二 咲 子

上 田 秀 雄

中 筋 フクヨ
― 菜・三幸・推薦

竹 内 紫 鑄
― 生々庵・薫風・酔々・推薦

板 垣 夢 酔
― 菜・水客・萬的・推薦

山 口 美 穂

木 村 はじめ
― 水客・紫香・萬的・正朗・明朗・推薦

奥 山 弥 山 人
― 多久志・喜風・綾女・推薦

原 さよ子
― 操子・武助・一三天・推薦

来ています。操子・富志子・こう・さよ子・ひで・幸代―混浴へいやだいやだと脱ぐゆかた―操子。

▼高知川柳社佐川花見句会から寄せ書拝受。川竹松風主幹ほか。

▽6月の句会△

▼菜の花句会は10日(火)夕六時から西郷会館で開催。会費三百円。題と選者/豪華・柔/生きがい・鬼遊/鴉・辛生/攻める・未定/席題二題当日・兼席五句以内。郵券百円封入。大路美幸あて。

▼南海川柳部句会は19日六時から南海本社食堂内で開催。題は―茶柱/三日坊主/いらち。

▼南大阪川柳会は20日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は―予期/じらす/暖か/空気。

▼東大阪川柳同好会は28日(土)六時から東大阪市民会館2Fで開催。近鉄永和駅下車。題は―心期一転/糠に釘/洋間/バランス。

席題当日二題。★

▼西尾菜句碑川柳大会は推定三百名を越す盛会。各地からのご出席で懇親宴も賑やかで明かるい大会だった。

田中狂二君逝く

川村好郎



ありし日の狂二氏ご夫妻

田中狂二さんが逝去されたという噂を聞き
びつくりしてお宅へ電話したら奥様らしい声
で、去る三月廿五日、心臓病で急逝された由、
何とお悔み申し上げてよいかその言葉も出な
い。享年七十三歳であった。

私が堺市の島野工業株式会社に勤務した時
共に働いていられ、会社内で333川柳会を
創立した時にいち早く入会し、川柳を始めら
れたのであるから約三十年の柳歴があり、川
柳雑誌時代に不朽洞会員に推され、つづいて
川柳塔同人として活躍せられた。島野工業を
定年退職し、同会社の下請工場として独立さ
れてからは業務多忙のため、本社会への出
席も殆ど無く、時々堺川柳会でお目にかかる
ぐらいで、昨年の大萬川柳大会に久し振りに
元気なお姿に接したのが最後のような気がし
日頃のご無沙汰が悔まれてならない。

狂二君は決して器用に作句する人ではな
かった。333川柳会で全没がつづいても決し
て欠席しなかった。私は或いは慰め、励まし
つづける事を祈る日々であった。狂二君は努
力家であった。川柳を楽しんでいられた。私は
いつでも思う。器用よりも努力と。その求め
て止まぬことが川柳を始め五年にして立派
に捻った。昭和三十三年川雑川柳まつりの大
会に路郎先生の特別課題「仲よし」に見事に

第一席に入選、立派な優勝楯を獲得し表彰さ
れた。

これ着ていきと仲よし服を脱ぎ

路郎先生は「何の奇もない表現であるが、
兄弟も及ばぬ溢れるような友情を汲みとるこ
とが出来た。何かむつかしいことを言わねば
句にならぬように思っている人はこうした句
を熟読が興味してみる必要がある」と仰言っ
ていられる。

狂二君よ、栄光のこの優勝楯は永く永く、
遺族の方々に守られてゆくことでしよう。
心からご冥福をお祈り致します。

お先きにと言わず師のもとへゆき給い

好郎

大森娛句楽氏死去

弓削駅構内に麻生路郎先生の句碑建立へ
へ職を賭して尽力された当時の駅長であ
る大森娛句楽氏（岡山県）が去る四月二
十三日に死去された。二十五日に葬送、
享年七十九歳だった。謹悼。

（浜田久米雄氏報）

★追悼文は浜田久米雄氏が次号執筆。

本社 五月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

八木摩太郎氏の追悼句会とあつて、堺の方々が柳社を超えて大勢ご出席いただいた。

三月は没食子・カネ女ご夫妻の句集刊行記念句会だったが、記者が会場へ入ったとき摩太郎氏が一人だけ会場におられた。早くご出席されたのであろう。妙にいまに目に残る。生々庵主幹の柳話は、まずご自分の体調から話が進む。タバコは早くから止めておられたが、こんどは酒もやめられたらしい。ここいらは柳人医博の面目躍如たるものがある。しかしタバコなど急に止めると頭がボーッとすると述懐される。

戒名をつくるために信貴山へ行かれたとか。万一の場合は葬式はどこで？ 葬儀委員長は誰にとか。まだまだお元気なのに、今日のお話はどうも沈み勝ちだったが、令息三氏がみな医博で、それぞれの意見を出すというあたり

から、会場にも明かるい笑い声が流れてくる。摩太郎氏の句碑の裏には発起人の一人として生々庵主幹のお名前も入っているそうで、それを東京から来られたお孫さんがカメラへ収められたそうである。

摩太郎氏の一生は、五月号の西尾菜氏の弔辞につきると結ばれた。

話が終わって一分間の黙禱をささげた。柳太氏が欠席され、雀踊子氏が代選された。月間賞人は内海幸生氏獲得。

(受付・児島与呂志・玉置重人・西川善紫)
(進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊)

出席―古方・善紫・与呂志・重人・水客・浪花・英壬子・三十四・九平・一三夫・翠光・蘭・形水・規不風・桐下・没食子・万里・綾女・萬的・柳宏子・柳選・柳伸・みずほ・たつお・山久・憲祐・美代・瓢太・弥山人・紫香・勝美・滋雀・天笑・維久子・敏・薰風・太茂津・きみ・としよ・英子・千万子・雅風・喜風・清人・左久良・文秋・小雅子・一三三・健司・吸江・洋敏・吐来・幸生・寿子・酔々・欣之・涼一・庸佑・好郎・弥生・頂留子・栗・度・雀踊子・生々庵・鎮彦・岳人・小松園・史好・鬼遊・凡九郎・葉子。

席題「旧家」

中田 たつお 選

連綿と定家守ってきた家紋

滋 雀

針箱も定紋入りという旧家

蜂の巣も旧家の軒と知っている

鬼がわらのにらみが少しきく旧家

寝室は洋間に変えている旧家

老松に負けずに旧家生きつづけ

定紋に栄枯見てきた鬼瓦

わびさびの街に旧家の低いのき

旧家また資料捜しにみだされる

ピラニヤのような当主が居る旧家

旧家というしじまの中の勝手口

参勤交代ここがお宿の黒光り

定紋の提灯棚で朽ちてくる

薄暗い奥の深さをもつ旧家

旧家から旧家へ嫁の荷が重し

旧家より呼ばれ何代植木職

夕映えに旧家の蔵の壁の白

土地売って旧家の所得見直され

土蔵から旧家のルーツ解けてくる

無遠慮な女に旧家覗かれる

若本多久志著

句文集「続・老いの坂」

好評発売中・頒価千円送料共

発行者 若本多久志

本社でお取次ぎいたします。

酔々 清人 鎮彦 形水 好郎 好郎 弥山人 凡九郎 醉々 雀踊子 鬼遊 雀踊子 天笑 涼一 みずほ 一三夫 文秋 幸生

表門いつも閉っている旧家

旧家今日珍らしく窓開いている

傷だらけの家紋長持詩がある

ビルの谷間に岩窟王の住む旧家

クラーのいらぬ旧家にひそと住み

金貯めて旧家の血筋が欲しくなる

旧家まだ練炭おこす朝を起き

あとつぎもケチで旧家につつがなし

接木して血筋守って来た旧家

カレージから外車ゆつくり出る旧家

裏町となった旧家に琴の音

没落の士族見て来た門構え

歳三つ並ぶ私の父の家

瘦身にきつい旧家のすきま風

まだ武士の血を口にする門構え

席題「世話好き」 阿萬萬的選

世話好きが娘の非行見ぬかれず
 世話好きが居て灰皿がきれいです
 世話好きは何時も留守勝ち達者です
 誤解されても母の世話好きまだ続き
 世話好きも親子二代の箔がつき
 寡婦へちと世話焼きすぎて疑われ
 世話好きが犬の縁談持って来る
 世話好きと別スカタンをよろしはる
 世話好きに子供たのんで旅に出る
 世話好きでいつも胃散を飲んでいる

紫香 形水 美代 度 維久子 幸生 小雅子 好郎 みずほ 蘭 勝美 滋雀 憲祐 天笑 たつお 洋敏 天笑 綾女 維久子 翠光 三十四 美代 古方 潮花 岳人

同窓会世話好き一本提げて来る

世話好きが又連絡に来る老人会

世話好きの前歯が二本欠けている

早う来て世話好き終いまで残り

世話好きがここにもおった楽屋裏

頼まれもせぬミリを提げて来る

世話好きにまかせてこちらは飲むとする

世話好きが一日動けぬ歯の痛み

世話好きが帰って大きく呼吸する

葬儀屋もご懇意と世話好き如才なし

世話好きが子猫のもらい手ががしてき

世話好きへ誤解招いた選挙戦

世話好きの女房が探すパチンコ屋

世話好きの眼に道連れが見えている

世話好きの顔善人と限らない

世話好きの眼帯痛しく思う

世話好きが二ヶ所かけ持ちするお通夜

世話好きが気の毒な程汗をかき

世話好きの乗せてあげるを怖がられ

世話好きのそれなり敵も増えている

ボヤクだけボヤいて世話好き気にしてす

連休を他所の子供に疲れ切り

身障児があつて世話好きで通り

世話好きの父をせめてる綴り方

世話好きがまた菊の苗あげましょか

兼題「堺」 河内天笑選

もののはじまりみんな堺と言う誇り
 堺史の誇りが丁目の目をつけず
 寺一つ一つに堺の歴史秘め
 百舌鳥古墳訪ねる者のバスツアー
 仁徳御陵のホン近くですと家自慢
 百万都市へ夢と希望を持つ堺
 地と生きている石津の浜の風車
 ひばりの囀り玉ねぎをふくらます
 切れ味に堺と知れる打刃物
 事堺になると多弁になる恩師
 仁徳も団地の民に見下ろされ
 刑務所の帰りにちくまの蕎麦へ寄り
 模様替えても堺に住む野武士
 茶人からコンピナートへ続く町
 人口と赤字がのびている堺
 不死鳥 堺コンピナートへ甦えり
 復活の夜市堺にある老舗
 入学へ知恵借りにゆく文殊寺
 包丁を買いに堺へ行く板場
 堺市へひとふりの鋸買いに来る
 商人の堺を大閑もてあまし
 自由都市の名残りを今に鉄砲町
 ギヤマンの頃は堺もよくもつけ
 天下の台所支えた堺の土根性
 商魂はルソン仕込みの堺の灯
 竜神橋遊女が泣いた浜の風
 侍の意地が滴る妙国寺

一二三 古方 吸江 九平 あいき 維久子 憲祐 度 憲祐 花梢 みずほ 一三夫 柳伸 英子 千万子 吐来 没食子 憲祐 岳人 鎮彦 どんたく 弥山人 庸佑 翠光 涼一 滋雀

利久忌へ門を開いた南宗寺

竜神も乳守も消えた塚地区

チンチン電車ゆつくり抜けて行く塚

布団太鼓をかつぐ塚の浜生まれ

こんな蜻とじやい界説りにつりこまれ

三吉も五郎も生んだ町の巾

団七も南北も男みな塚

浪六五郎晶子と塚指を折り

自由都市塚晶子の碑が似合う

高灯籠塚に海の色がない

海に生きた男の匂いある塚

汐騒の今はきこえぬ晶子の碑

遠メカネ黄金の日々見えてくる

浜寺の松が忘れた海の風

臨海のテトラポットも春の夢

新入りの塚市民は山に住み

好きな人待たず塚の花時計

飛躍時機うかがう塚のエネルギー

塚なまりつこて塚の灯を守る

兼題「ふるさと」 板尾岳人選

ふるさとは川原の石も口を利く

故郷はもう眠むってる汽車の窓

ふるさとでたんのうしてきた母の味

ふるさとの道は素足が好きという

ふるさとは三輪素麵の出来るとこ

負け犬になってふる里考える

左久良

たつお

紫香

涼一

太茂津

水客

小松園

栗

水客

萬的

雀踊子

栗

酔々

たつお

美乙女

みずほ

維久子

頂留子

天笑

故郷へ片みち切符にぎりしめ

ふるさとは話せばわかる人ばかり

ふるさとをすてて涙に強くなる

ふるさとは無学の老父がいて守る

ふるさとの海の蒼さに抱かれよう

ふるさとに帰る「大和」は海の底

ふるさとが写る別居の洗面器

ふるさとの言葉説りに欺される

ふるさとは母の乳房の甘いところ

ふる里の河童の話まことなり

ふるさとの香り封書からもれる

ふるさとの山には母が住んでいる

ふるさとの月はいつでも晴れている

ふるさとの無い子地球儀まわしている

スパーで買うふる里の野沢漬

ふるさとを掘るとききれいなお下げ髪

ふるさとを捨てた男で金を貯め

ふるさとへ刑事の方が先に着く

入れ知恵はふるさとかからありひげを剃る

ふるさとへ飛ぶ雲を見る草枕

ふるさとに七つボタンが置いてある

やわらかい説で竹の子売り切れる

ふるさとの母へ鳩でも飛ばそうか

ふるさとをそつと覗きにサングラス

強運の時は故郷など忘れ

ときどきはふるさと想い出すパンダ

ふるさとの山を描くとねむくなる

花梢

静馬

憲祐

弥生

寿子

史好

規不風

柳宏子

維久子

栗

蘭

みずほ

小松園

桐下

花梢

維久子

洋敏

涼一

弥生

二三

酔々

美代

清人

清人

柳宏子

欣之

天笑

ふる里の月かたむいて母が死す

出世したデマふるさとを遠くする

ふるさとのトイレは下駄をはいて出る

帰省する男の見栄持つ靴すべり

ふるさとで開けてしまった玉手箱

ふるさとを捨てた男がもつ土鈴

二重橋渡るとふるさと近くなる

兼題「長身」柳太氏代選 岩本雀踊子選

長身に宿の浴衣が笑い出す

長身のモデルの服にだまされる

長身のにぶい動作をはがゆがり

長身ですこし猫背で善人で

長身の遠慮が何時も前かがみ

長身のまだその上に面長で

長身もやっぱり背伸び五月晴れ

くたびれた靴まで長い今日の影

長身が歩く風が騒いだす

人一倍損得はげしい長身で

長身の間のびへこのころ髭を置き

長身が遠慮している宿浴衣

長身が先頭で旗持っている

雲をつく位置で涼しい瞳が笑い

長身は運動部からならわれる

中年の長身貴様とも見られ

頭一つ目立って悪いこと出来ず

長身の無口がくれた人間味

鎮彦

度

涼一

雀踊子

みずほ

小雅子

岳人

美乙女

どんたく

静馬

重人

千万子

涼一

英壬子

英壬子

史好

柳宏子

萬的

英子

規不風

吐来

吐来

敏

好郎

吐来

英子

英子

長身を曲げて証人席に居る
身長がのびて根性おき忘れ
長身の息子を叱る絵にならず
長身は長身なりの背の丸み
長身の歩巾は妻に気をつかう
長身でセンスの良さが生きている
人垣の外から長身首を出し
とてもものつぽで目立つのが大嫌い
長身のいつか猫背の癖がつき
背の高いのを目印について行き
モナリザが立てば長身かも知れぬ
長身の姿勢くずれてきたリユック
長身の夫がかばってくれる傘

兼題「役所」

川村好郎選

酔々 醉々
鍵司 鍵司
度 度
小雅子 小雅子
欣之 欣之
洋敏 洋敏
文秋 文秋
天笑 天笑
一三夫 一三夫
瓢太 瓢太
桐下 桐下
花梢 花梢
雀踊子 雀踊子

役人に似合わぬ愛想親まれ
私営ならとつくに潰れている役所
縁遠い女で区役所に勤め
とり得ない子で役所へ勧めさせ
面ソツから役所織い意地を見せ
身に付いた役所つとめの抜けぬ父
お役所にユーモアなんか落ちてない
形式と判で役所というところ
七つ目の判で止まっている役所
判ボンと押して役所は昼にする
堂々とお役所赤字予算組む
融通の利く役人で見直され
不況でも何んの心配ない役所
市役所を出ると小石を蹴つとばす
恩給を数える役所のひるさがり
汚職記事以来役所の低姿勢
お役所の機械化分だけ早くなり
税金督促僕と役所にある絆
倒産がないお役所は昼寝する
役所から出たらこんな青い空
待望のベビー役所へ飛んで行く
すぐやる課だけが生きいきして役所
休まずに遅れず仕事せぬ役所
市会議員に頼むと役所とんで来る
お役所の優しい言葉に身構える
恩給がたより役所の隅に耐え

三十四 三十四
庸佑 庸佑
九平 九平
天笑 天笑
没食子 没食子
潮花 潮花
一三夫 一三夫
左久良 左久良
栗 栗
水客 水客
吸江 吸江
天笑 天笑
美乙女 美乙女
度 度
花梢 花梢
たつお たつお
弥山人 弥山人
一三三 一三三
弥生 弥生
太茂津 太茂津
としよ としよ
滋雀 滋雀
岳人 岳人
史好 史好
幸生 幸生
好郎 好郎

(河井庸佑・整理)

▼直原玉青指導・第19回「青玲社日本画展」
▼直原玉青弘法大師伝七図「六甲風景と動物」
のいる風景」が5月9日〜14日まで阪急百貨
店7階催場で開催。連日盛況、好評だった。
▼第4回竹陽会書道展「たけはら川柳展」が
5月10〜11日、竹原市三井会館で開催。ここ
も好評だった。

YFC会員募集・初心者歓迎

▼本年二月から梅田阪急ファイブ八階・オレ
ンジルームで開られていた川柳セミナー、
「生々庵川柳行脚」の会員を募集している。
会費千円。毎月第三火曜日の午後一時半から
三時半まで。初心者をおすすすめください。

妻の遺句

草深酔升

老妻病歿以来、置いてきはりにされた余生
のまごつきに加えて持病の喘息等、健康も勝
れず作句もままになりません。先日、百カ日
も済みましたが、病床の老妻が残して逝った
駄句が見つかりました。

蝕ばれゆく音続に夜枕に 千種
やれやれと思つ峠に死期を待ち 同
残されたしばしの命の夫婦愛 同
身も心もあずけて神のメスを待つ 同
虹の橋かけて浄土を造りたい 同
時、涙がポトポト落ちました。(一三夫)

(一三夫)



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり15周年記念吟行 谷垣史好報

大原女の指にきらりと古都の春
鹿の影長々と奈良暮れる
やすらぎが欲しくて古都と夕ぐれる
古都の池鹿せんべいが浮いている
古都の風別れた人に逢えそうなる
丹の彩を蘇らせて古都の雨
花形に隠し子があり遠い町
恋一つ捨て花形から降りず
古都に咲く梅は歴史を語りかけ
千年の古都を訪ねて句座にいる
ときに華やかときにひそやかに古都笑う
開発と保全の狭間 古都揺れる
花形の楽屋出前のソバがのび
古都の住人は能面の顔に見え
にしんそばだけが取得の古都の春
大仏殿の蓑一きわよく目立ち
古都の鐘青春の想いを引寄せる
観光へ古都純情を掲げへらし
大文字消えて古都の月冴える
防人も来たど らんまん古都の春

好一郎 美代 岳人 花梢 鬼遊 弥生 ゆき生 星斗 吸江 立見 英王子 鎮彦 酔々 瓢太 儀弘 万里 雅風

み仏も春の風待つ花の寺
花形の行く先き先きは春になる
和歌山七面句会 中筋
ワンマンの父であったと七回忌
急がずに又休まずに貯金箱
家繼いで箱屋の一生糊羹し
がちりとヒル銀行の街並木
ワンマンの一声世間をさわがせる
ワンマンはカメラの砲列にらみつけ
塗文箱遠い時間が秘めである
銀行の虎の子発音が不良なり
自から箱に閉じ込め如く生き
箱入りもアスも並べて入社式
銀行で高校野球観戦し
銀行の隣りに住んで預金なし
重箱の隅ほじくるごと嫁いびり
ワンマンの期待の孫は学者肌
ワンマンはいつも孤独の影をひき
銀行から歳暮が届く身分にて
銀行の扉冷たい午後三時
オースケイ川柳会 大坂
看護婦の手を借りている松葉杖
恋進み年上と知る誕生日
診断の手が狂い出している美人
若者に優先座席先取られ
二本目の追加で荒れた誕生日
面会タイム看護婦さんの薄化粧
看護婦の病氣医学書もって寝る
女性として看護婦に話す回復期
看護婦のやさしい顔の消えるスト
屋台から中年の笑い転げ落ち

憲祐 史好 三幸報 品子 二咲子 文厚 光治 良三 晃 隆恵 宣和 和美 ひろむ 啓子 フクヨ 五穂 周穂 わか 勇次 三幸 形水報 亜也子 百合子 亜成 安竹 聖地 千夢 信楽 有一 博泉 てまり

笑いながら大担すぎることを言う
昇給の袋に笑いつめてある
看護婦に叱られている大男
参観日よその子ばかり手が上る
替否との拳手中立で迷つて
誕生日重ねて迷い深くなる
天中殺を笑い飛ばして儲ける
はかり売りの赤飯でする誕生日
千年の杉台風をあざ笑い
川柳たけはら 森井 菁居報
ズボン引いて寝てみたものの妻の留守
際限がないから欲がおそろしい
経験が静かに燃える四十過ぎ
風に聞き雲と語ってまだ迷い
哀しみはあ雲にのせ風にのせ
冬籠りつんつん髭が伸びてくる
まだ若い血がある朝の牡丹雪
子の走るレールを磨く妻でよし
紙飛行機飛んでけ飛んでけ夢の国
へドロの底に竜宮城があるものか
湯どうぶの湯気まんまるくいる夫婦
人生孤独そんな想いを霜の朝
風もんもん酒もんもんや離職票
逢うよりも逢いたい気持ちに酔う私
貝殻が仲間呼ぶ日の海は春
写経する無念無想の四十言
行つて来るよと妻に体調言えぬまま
値上げして売れる企業が羨まし
待つ時もおさらしいする英語塾
季節風無力な女祈るだけ
やさしさにくるまれば夫に感謝する

一念 野度 雅洋 弥生 形水 入仙 好郎 静水 房子 洋之祐 かつ子 笑子 蘭幸 不朽 鬼焼 菁居 小四紀 菁居 寛子 鈍舟 かつこ 敬子 一路 節夫 英詩 秀夫 中一 眞子 浄美

川柳わかやま

堀端

三男報

書き置き筆の乱れにある本音

未来図の白さへ若い血が躍る

美しく訣れて電話はもう鳴らぬ

おどけてる男にさむい空がある

こんがりと焼いておどける瞳が憎い

若い芽へ天地は恵み惜まない

金だけが本音手を変え品をかえ

地位名譽捨てておどけて坂下る

本音ふと垣間見ながら持つ不信

未知という世界へ若い血を燃やし

若い娘の指輪が本音をまだ聴けず

つき合わす膝が本音をまだ聴けず

片恋がおどけた背で泣いている

苦に耐えた若さが勝利の風を呼ぶ

おどけてるボスの横顔見てもしい

青年の主張へ未来像溢れ

洗濯機へ妻は本音を沈ませる

いつにない言葉に本音が見えかくれ

おどけてはいるが何かがひっかかり

奮然と異議あり若さが立上がり

川柳塔まつえ句会

恒松

負い籠の分だけ母の背が曲り

冗談の一つも言える天使持つ

活きている証提市場騒のしずく

しとやかに天使が渡る虹の橋

屑籠の屑それぞれの私見持つ

天使のようにテテコル舞いおりる

肝つ玉半分に減り今日を終え

そっぴえば芽えぬ顔色だった事故

雀踊子

幸

和子

芳朗

壽子

としよ

緑楼

与史

光代

誠一

佐代子

裕美

式

勇太

幸代

きみ

白光子

寿美数

悦子

天彦

叮紅報

寿美子

愚童

早苗

登美也

みる

鶴丸

孤呂二

通児

叮紅

大田川柳会

藤田軒大棧報

家柄で結婚したのが運の尽き

山かけに荒家残す過疎の村

家柄と人柄常に同居せず

風俗の歴史刻んだ門構え

底辺の暮しを家族温め合い

息づかい臨月が来た嫁の肩

肩までのチビとノッポで万才師

頑まない遺児に可細い母の肩

錫杖がピシリ座禪の肩にくる

早咲きの花を仏間に先ず供え

咲く縁を待つ娘に春は通り過ぎ

闇を這うどこかに花が咲くらしい

咲く花に蝶も跳ばせる孫の画帖

幸せな牡丹晴着の裾で咲く

手の首へ踊らぬ猿がいて困る

妻病んで家から音が消えてゆき

幽霊の出番幽霊の音となる

義理下も母風習を口はさむ

肩の荷を下して古稀の春うらら

岸和田川柳会

植山

文明を離れて歩く気の軽さ

子に歩巾合わせてもらう齢になり

歩かされ詰められやとスト終り

老夫婦互に歩巾かばい合い

寝不足にまだ足りなくて春の風邪

母子寮の折紙人形ひな祭り

複雑な世相花は満開城まつり

観梅に誘い出する春の風

明日から他人に戻る家裁出る

静代

嘉水

幸一

煩悩児

みのる

可保留

独仙

三三男

雀村

雷音坊

立雲

早苗

多賀子

九二老

夢酔

孝太郎

軒太楼

秀子

孤雷軒

武助報

ますだ

さよ子

辰雄

白光子

波津

民治郎

加仙

春栄

武助

希久志

カラフルな薬に命を預けて居

言い訳になりそつだから耐えている

旅馴れていとも気軽に発つ旅路

早春の輝き老いにまぶしすぎ

春の香はやつぱりに春に食べるもの

川柳後集(岡山市)

井上柳五郎報

春の海眺め凡人何思う

涙ぐむ顔眺めて肩を抱き

実物はなんだこれかという眺め

事勿れ主義が眺める側に立ち

絶景も雨で霧だけ眺めて来

お車が来たと酔客ほうり出され

不自由に克たねばならぬ車椅子

憐憫ゴロゴロ廃車野に晒し

無礼講車座にある上と下

車座の正面美人よく写り

無理きかぬ体で口は達者なり

手土産と一緒に無理も提げて来る

ただ酒を飲ませられ無理が断れず

また無理を言いに行つて行く実家

無理を云う孫のねだりに祖母が負け

無理からぬ話と思うたのが弱目

菜の花句会

高杉

さりげない合図で八百長動き出す

裏町のよさ甲乙のない暮し

あれが合図やったんやんと今頃

守つて守つて守りぬいてる家計薄よ

世直しの狼火をみんな持っている

裏町は留守の行く先知つて上げ

富志子

みずほ

こう

ひで

操子

鮫虎狼

梁太

柳五郎

たけ志

佐加恵

久米雄

幽谷

草風

恒洋

定平

正道

胡風

哲郎

秋月

元一

博友

鬼遊報

茂雄

恒明

凡九郎

度

鬼遊

昭声

鶴花

夕花

二人三脚たまに浮気がしてみたい
少し単怯な多数決の中にいる
約束をまだ守つての国訛

へそくりが浮気心をかきたてる
裏町は泣くだけ泣いて酒にする
一寸の虫にも守るいのちあり
春今宵月も浮気の雲がくれ
ウインクを横の男に盗まれる

裏町を抜けると多いだましうち
信号を覗くとイライラ病になる
左手がすぐに浮気を考える
いかなごが台図に今年海があけ

川柳ささやま 河原みの報
ざりざりの線でモデルは夏を呼び
花嫁のモデルばかりで嫁きおくれ
モナリザの微笑モデルは知っている
薄ものの腰にライトの明る過ぎ

お多福を顔で食べてる千歳飴
初戎館屋は本家はかりなり
角のない言葉を探す飴をなめ
返事した途端口から飴が落ち
せせらぎもすつかり春の寺まいり

春一番洗濯ものもびっくりし
さかずきで五感に春をたしかめる
舞扇はしく光も春の色
台本に母の仕草を子は学び
発表会一息だけの子のセリフ

城北川柳会 川口 弘生報
肩の荷がだんだん重くなる机
末の娘も嫁がせ肩が軽くなる

酔々 糸葉 栗 柳 伸

小松園 岳人 頂留子 鎮彦 弥生 雀踊子 みずほ

柳選 ひか平 越山 宗珠 貞子 国野 八陣 文平

ゆきお つや子 深月 可住 与志 法濟 千代子 愛子

弘生報 鬼遊 ふみ

肩書のない末席が派手に飲み
定年の家でも肩身狭くなり
一国の運命担う肩もあり
肩書が巾を利かせる夕社会

値上げが肩に重荷の子沢山
重たかろ皆んな乗って父の肩
おみやげの今朝も役立つ肩たたき
肩揉んで愚痴もいっしょにほぐしたげ
肩叩き孫の目的何だろう

出迎えた母の肩抱く里の道
肩書きの多い人ほど偉く見せ
肩書きに遠い主婦の労働歌
見栄張らず不平も云わぬ三猿党

我が家にも浪人一人夜がなし
男子出産快適な朝となる
一山を踏えて四方の峰望む
新婚の旅から快適ですとTEL
短冊を写す人あり梅ころ

京都塔の会 松川 杜の報
人恋し無性に恋し風も止み
毒草と思えぬ花の彩が好き
薬飲む水を残して済む食事

目を閉じて柚子湯にひたる雨の音
子に渡すバトンに鈴をつけておく
白無垢の幻想があり雪降り続く
工事場の泥下請けは踏み馴れる
春の泥田螺も欠伸しとうなり

積んぴのただけ古本の希少価値
総ルビのある古本の希少価値
手放した訳は蔵書印語らない
生きること一筋尼と寒椿

テルミ 寿幸 右近

午郎 なりこ 茂樹 満津子 千子 美恵 左春

喜代子 炉斎 ますえ 道子 捷一 三十四 星斗

佳丹子 花代子 紫香 美穂 明代 水客 白漢子 潮花 飛鳥 誠史 求芽 弘三

はにかんで尼僧女をのぞかせる
黒髪やたらなあと尼僧の目鼻たち
異性への思慕へ明かるい花が好き

川柳大纂 西岡 洛醉報
目が合つて心見透かされそうになり
微笑するネオンへ男足みだれ
三寒と四温へ花も身構える

又明日を生きます妻の高軒
成人に選挙を見こす祝賀状
お人好し今日と云う日曜日そがしい
地下勤務明けて朝日へ躍り出る
送別会今日は主役で床柱

指切りをしたら素直に見送られ
餞別に義理だけの名が合乗りし
別れたくなかつた海のある人と
倦怠期別れる程でない二人
別居する夫婦にあつた隙間風

芳子 杜的 和友

比呂志 三十四 秀峰 真佐志 君枝 洛醉 本蔭樺 喜洗 喜醉 佳加志 天樹 天平 希久志

佳句地10選 (前月号から) 藤村亜成選

悔恨の音のひとつに棺の釘 不朽
児の寝顔ふつと編み棒やすませる 寛
金策の足が夜桜通り抜ける 洋々
電卓でたたく利益のおそろしさ 栗
善人のかけらを覚ます神の鈴 公子
大声の方へ片寄りかけている 博泉
胸張れば丸い背中に痛み知る 洛醉
倅せと思う日葉顔も美しい 江留美
解決がつかず紫煙がむせかえり 千代三
小川に足つけると春になる陽さし 早苗

ある粋な別れあと味残さない
平和です○○会がすぐ出来る
戦友会まだ青春が燃えている
すばらしい出会ひに裸になれる友
ときめきは火へ会う日の色を撰る
再会は手の温もりを知っている
不細工な包みて親の心着く

柳川化粧檜

植村客遊子報

釣針を吞まされていた金バツジ
外孫のけんか相手も皆帰り
雨やどりする気の軒に自動ドア
同じクック鳩の仕草は鳩のもの
同じ椅子人が変わってよく響き
味噌汁の湯気がかかれた可愛い瞳
砂つけたまま黒星が引き下る
雲助がたむろす峠春うらら
アベックの審は男が割ってやり
大物になるに良心じゃまになり
振り袖が紙風船を飛ばさせず
コップ酒一杯でよい喉仏

南海電鉄川柳会(大阪市) 辻

圭水報

情報をつれしがつるあほも居る
情報がどこでできたか僕にこず
情報過多自分を生かす道をより
癌ですて医者情報流さない
どこにでも二、三人居る情報や
情報を流す女でヒマカある
情報を信じるあさい知恵を持ち
早耳がズレて喋ってデマとなり
情報に私服警官雄飛する
さすが商社世界の情報手に入れる

胡蝶 敏 与呂志 笑風 道子 淳水 弘生 紅月 秋月 岳詩 葉香 奮水 実男 越山 永栄 大鷹 秋峯 秋山 客遊子 摩太郎 圭水 宏子 東雲 登志子 柳選 清女 与一 善紫

注進に来た情報は買うてやり
情報社会子供の話も大人じみ
情報を頭でこなし楽に生き
情報に④を押すともれ始め
情報に一喜一憂あれ相場
情報に大きくゆれる兜町

三猿もテレビで情報聞いている
思い違い氷解させた話し合い
話し合い寝がえり打たれやり直し
省エネを活用ピンチ超越える

南大阪川柳会

中川

滋雀報

ぼちぼちと女に変わる娘が眩し
口ぐせはぼちぼちやれとまわり椅子
いい加減な男とぼちぼち判りかけ
終業の支度ぼちぼち眼が冴える
野良犬もやんちゃの情け知っている
秀才にやんちゃの思い出一つない
故里を歩けばやんちゃの跡がある
叱られたやんちゃその冬の絵をやぶる
せつかちなつくしが冬の絵をやぶる
せつかちの自動扉はゆるく開き
せつかちの手柄ビーパー早く呼び
二人もつひいきぐらいの仲でなし
安く売るうちはひいきにしてくれる
御ひいきの歌手と夫をみくらべる
ひいき目に見てもやっぱり落ちこぼれ
アホな話なら頭冴えてくる
麻雀を話したら頭が冴えてくる
ひと夏の恋とサングル知っている
サングルを男が履いて来る夜店
サングルのちんは気付かぬあわてよう

柳伸 勝美 維久子 千代三 白梅 泉秋 雅風 綾女 儀一 正流 柳伸 勝美 維久子 千代三 白梅 泉秋 雅風 綾女 儀一 正流 柳伸 勝美 維久子 千代三 白梅 泉秋 雅風 綾女 儀一 正流

勝山双葉川柳会

河野 君子報 夕花 英王子 あいき

ばら活けて薔薇よりあつき炎をもてり
花活ける心の人を断ちたさに
スカートの丈に企み秘めて春
幸せな双葉も陽に伸び風に伸び
スカートの小さくなった自己嫌悪
花いっぱい咲かせて娘嫁ぎゆく
嫁がせて花も活けない日がつづき
スカートに変わって女らしくなり
蛙の子蛙の道を進み出す
花ふぶき一人住いの客となり
見事にも乱れず一つ落ち椿
土もたげ芽吹く双葉も健やかに
幼な子も双葉のうちにしつけおく
名人にも双葉の頃があつたはず
可能性秘めて双葉は天を指し

虹川柳俱樂部

新岡回天子報 実美

校長の寝言を聞いた旅の宿
カラオケですます芸者の泣きどころ
毎日をわねいて入院だけは避け
どの顔も明日を背負っている職場
相続を二豊の妻倍にさせ
ねだられる色紙短冊老い愉し
高い山登って知った広い海
白色の尻押しして来る春の汐
関心を持たねば何でもないかけら石

東大阪川柳同好会

齋藤三十四報

又悪い酒癖から親のれん
酒癖もいつか親父のあとをつぎ
酒癖をあしらう心得妻の知恵
酒癖を知っているので誘わない

美山人 弥子 千代子 綾女

酒癖に罪をかぶせて頭下げ
カラオケで唄につまずく総入歯
執念の餅が入歯を離さない
総入歯はめて社長の顔となる
イデオロギーどつてあろうと建国祭
依怙地だと云うまい老いの紀元節
建国祭母はしつかり仕事する
建国へ日本男児を意識する
建国祭国旗に霧ししみがある
建国祭千鳥の霧が深くなる
建国祭榎原神宮孤立する
猿年に主役は山で欠伸する
錦着て帰れば親類増えている
泣き上戸笑い上戸も居て花見

川柳ウイロー社

前山

良京 三十四 孤舟 慶三 八斗醉 勝美 滋啓 鎮彦 湖風 かす治 小松園 喜風 柳宏子 度 北海報 雪女 北海道 秀山 風彩 公女 万里歩 昭子 虹宵 拝山 歌子 紅花 梨花 三石 良子

運命の扉を開く玉の汗
懐手踏めば自動のドアが開き
開き具合どうあろうとも花見酒
白百合川柳会(岡山県) 嘉数千代香報
人生の宴三々九度に舞う
カラオケでほんばりも酔う花の宴
サヨナラの追憶風と赤トンボ
オカメヒョットコ結ばれた和が美しい
背水の陣へ再起の踏むべタル
過去捨てて晴れの門出は葉つ葉服
再起誓うおとこに五月の陽がまぶし
春風のような情けに泣きました
愛情の言葉に触れたい再開よ
風糸のもつれへ父子の情が揺れ
友情がほのほの匂う雨に濡れ
土匂う掌から人情こぼれ落ち
強情な父が待つてる里帰り
どやされた友情男背なで泣く
人情の砂漠とおもふ世をみつめ
平手打ちそんな友情だつてある
ひとすじの愛情五月雨が温い

三井ヶ丘川柳会

高田

博泉報

草海 蒼生 晚舟 万福人 卓香 幸栄 若恵 哲子 昇山 京太郎 つね 照子 弘子 貴枝子 勝江 九坡 昇魚 真弓 千代香 野生 雅洋 光夫 博女 世山 小路 古方 亜也子

鳩胸へ聴診器の輪順に消え
冷たくて少年院へ逆戻り
(前月分)
胸襟を開けば馬鹿にされそう
すて大の鼻ならしてる石だたみ
警官の尻尾にあった安全地帯
胸を借す父と息子に距離は無い
悪人が突然月へかけ出した
ひょうたんのくびれを主婦の声が抜け
くすぐると妥協の中も広がる
炎天の汗へ天手の氷水
母の胸家族の愚痴を溜めている
犠牲者の妻に上司の冷たい目
庭の梅咲いたとゆとりある便り
犯人の子に学校が遠くなる
うたかたの恋をアルバムからも消す
母の胸知らずに太る哺乳瓶
ボディビル逆三角の胸の瘤

江留美 亜鈍 柳宏子 豊 弘生 琴音 良子 一度 一念 晴風 てまり 三千子 隆子 亜成 恒明 静歩 薫風 編集部

朝日新聞大阪版に川柳登場

▼朝日新聞大阪版に短歌と俳句は出ているが、川柳は仲間はずれになっていった。ところが六月から桶高薫風選で登場することになった。せつかく得た晴れの座である。これを支えるのは投句である。応援したいだきたい。(題「父」締め切り六月四日)
▼若林草右氏(通信病院内科医長)が5月12日死去(市場没食子氏が次号に執筆)

暑中広告受付!

本誌五段の一段二千五百円で
す。グループをおもちの方も
ご利用ください。

★原稿締切6月末日

あなたもゼヒ一口!

この寸法が500円
です

川柳塔社

振替口座大阪
三三三六八番

9月27日・28日

松江で同人総会

任会 6月2日
事 7月3日
常 8月4日
理 9月4日
~~~~~  
本社句会  
~~~~~  
8月7日
9月8日
10月7日
二賞発表

八月号発表 (6月15日締切)

● 募集 ●

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「ホームラン」 里小路 選
「夏」 和田維久子 選
「前列」 久家代仕男 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りません。
★用紙はなるべく柳箋をご利用ください。

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢 小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「空」 梅本登美也 選
「予定表」 林野甦光 選
「肩すかし」 奥谷弘朗 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

6月の常任理事会は2日5時から

念記の風薫橘と忌と郎路

日 時 七月七日(月) 午後六時
会 場 金 属 会 館
南 区 鰻 谷 東 之 町 10 番 地
地 下 鉄 堺 筋 線 長 堀 橋 下 車 東 ス ぐ
電 話 2 7 1 - 3 9 3 5 番

柳話
「ひと時」
「民」
「鶴」
「駅」

中島生々庵 選
河内天笑 選
黒川紫香 選
岸本一風 選
橘高薫風 選

兼 題
各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

8月の兼題

「各駅停車箱」 「青謎」

定価 四百円 (送料29円)

半年分 二千五百円 (送料共)

昭和三十五年五月二十五日印刷
昭和五十五年六月一日発行

編集兼 中島蓬太郎
発行人 藤原童心社
印刷所 藤原童心社

〒542 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三三九八番
振替口座 大阪・三三三六八番
普通預金口座番号・一〇二七八三

・ペンペン草・

★前号は写植さんの手が変わったため仕事は遅いわ、出来は悪いは、散々な目に遇った。そんなある日、テレビ朝日さんから4月25日、26日に弓削川柳社からの生中継に出てくれとのことだった。こと川柳に関することは原稿もおことわりしているが、だが「漫才作家」として、「お声がかかったのである。これなら、泉下の秋田先生もよろこん

でくださるだろうから快諾したわけ。

★しかし、昨年からはじめて病名を持つ人間になっているので、そのことがちよつとひっかかったが、それほど少し足腰が弱ったことと水が切れるとノドと舌が渇き、声がかやかすれる程度なので、そこは心臓でなんとかお茶をにごそうと、テレビ朝日のスタジオの方まで新大阪から新幹線のグリーン車に乗り込んだ。25日の午後3時。(この日の朝

▲菓子コーナー

▼雨粒といえはラッキョ型のイメーヅが強いのですが、本当はまんじゅうのように底が平らな半球状で、降る途中で空気の抵抗にあい「下半身」がひしやげてしまうそうです。

▼カタツムリは梅雨どきの景物の一つ、大きな家を背負ってノロノロ歩くカラから出ての歩は胴体ではなく大部分が足で、それで、カミソリの対の上を歩く軽むき師でもあります。せめて私はいつとも両足を地面につけて歩きたいと思えます。

やつと徹夜で五月号を校了にした。疲れがちよつぱりに残っていたが、弓削の近くの「八幡温泉」では一室あてがわれ、久しぶりの快適な旅となった。ぼくは相部屋はダメである。なにせ夜が白んでこないで眠れない夜行性のため、他の人の睡眠を妨げるからだ。

★出発する日、故秋田先生の奥さんに「先生の七光りでテレビ朝日へ出していただきます」とご報告申しあげたことである。プロデュースの津田政氏は「夫婦善哉」で秋田先生と四年間同行された方であった。なにもかも秋田先生のお引き回しだと思った。司会の阿部牧郎氏は作家としても著名な方だったし、女性の司会山田元子さんは爪も髻も赤く塗っていた。上品ないいお嬢さんだった。上品ないいお嬢さんだった。ジョジョースの開け方も知らないぼくから娘のようにお世話になった。列車の中でフタも開けずにタバコの灰をボンボン落としているのと津田氏がフタを開けてくださったのが、泰西寺(住職は長谷川紫光さん)の階段を這って上がった

ら、阿部氏と元子さんがほかのお尻を押してください。た。テレビを意識しながらも、人間を長くやっていると厚かましくなるものだ。秒単位の仕事

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ!



大阪・東京
大丸
京都・神戸

★二分間ばかりお喋りする原稿を頭に入れとくと30秒ほどでやらされたり、太

くのお尻を押してください。た。テレビを意識しながらも、人間を長くやっていると厚かましくなるものだ。秒単位の仕事

★秋田先生は大家だから、列車を降りる時、どのキツ

★景中広告よろしくお願ひ申します。
(不二田一三夫)

肉体疲労時のVB₁₂補給に
アリナミンA

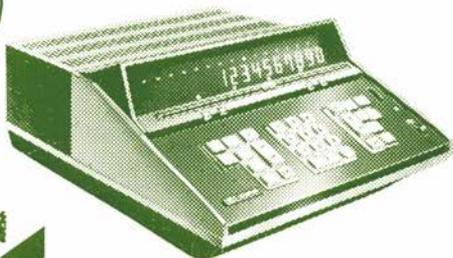
アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気、貧血、説明書をよく読んで正しくお使いください。各々わたくしは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



昭和四十一年一月九日 第一種郵便物認可
昭和五十五年五月十五日印刷
昭和五十五年六月一日発行(毎月一日発行)



タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリ高級品
SANYO 三洋電機株式会社

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイ



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドージマ店
近鉄(アバノ・上六・奈良・東大阪各店)
京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店

大阪・なんば



TEL (641) 0551